



建築人

4

2013



大阪ホンマもん

建築人

4
2013

目次

38	37	34	32	30	26	24	22	21	18	4	2
理事會報告	建築相談	編集後記	インフォメーション・事業案内	建築士会CPD	大阪府建築士会の取り組み	社会に必要な建築士となるために	『公益社団法人』移行のご報告	第32回大阪市景観建築賞入賞作品	ひろば	建築構造案内	加登美喜子
建築の射程	山口洋典	協同困難なコミュニティにおける協働可能性を求めて	記憶の建築	松隈洋	新宿三井ビルディング	1974年 超高層ビルの公共性	匠の巧	ルートアイアン	株式会社よし与工房	建築の射程	山口洋典
Gallery	建築作品紹介	遠藤照明	テクニカルセンター	設計	竹中工務店	施工	竹中工務店	武庫之荘	メディアカルキューブ	設計	徳岡設計
大阪ホンマもん	建築人	石堂	威	Gallery	建築作品紹介	遠藤照明	テクニカルセンター	設計	竹中工務店	施工	竹中工務店

二〇一三年度「建築人」の編集について

編集人代表 米井 寛

昨年四月に「建築人」の紙面をリニューアルし、一年が経過しました。会員全般を対象としつつ、様々な立場の読者を想定した幅広く、かつ深く掘り下げた内容の記事を掲載し、さらに紙面デザインにも気を配り、読みやすく親しみやすい紙面を目指してきました。

今年度もこの方針を継続しますが、一部の企画を模様替えます。これまでの「テクノロジー」に替わって「建築の射程」と名づけた新企画を四月号からお届けします。これは、建築が関わる対象や領域をより多角的にとらえ、特に建築と文化との関わりを取り上げていきたいという主旨で企画するものです。多彩な執筆者をお招きして、このテーマを掘り下げていきたいと考えています。

「ギャラリー」に掲載された建築作品を対象とする「建築人賞」は、今年で第六回目となり、本会の主催する賞として定着しつつあります。これまでの五回は、石堂威氏に審査をお願いしてきましたが、今回から新たな審査員をお迎えする予定です。詳細は「建築人」誌上で改めてご案内しますが、「建築人」に掲載された作品はすべて「建築人賞」の審査の対象となりますので、皆さまの作品を是非「ギャラリー」に掲載していただくようお願いいたします。

本会建築情報委員会の活動は、本会ホームページやFACEBOOKでもご覧いただけます。私たちは、従来からの紙媒体である「建築人」を建築士と建築士会をつなぐ重要な媒体であると位置づけています。読者にとって魅力的で有意義な情報をお届けできるよう努力しますので、ご愛読よろしく願いたします。

大阪ホンマもん解説

写真 田籠哲也 文 牧野高尚

大阪における近代建築保存再生工事の象徴的な建物と言えは大阪市中央公会堂だ。始まりは明治四四年（一九二二年）に株式取引所仲買人であった岩本栄之助氏の寄付による。翌年に中之島を建設地とする指名設計競技が行われ、岡田信一郎案が選ばれた。実施設計は公会堂建設事務所（実質的には辰野片岡建築事務所）が担当。構造は鉄骨煉瓦造及び鉄筋コンクリート造による混構造で、規模は地下一階・地上三階建て。施工は直営方式で行われ（清水組大阪支店を主としながら分離発注）大正七年（一九一八年）に竣工。

時代と共に再開発などに関する議論が高まり、新聞では景観保存も盛んに取り上げられていた。その最中、大阪府建築士会では平成元年に「再生案への提案」を求めるコンペを実施。積極的な保存案を最優秀作品として選出し、一石を投じた。

忘れてはいけない。現在もこの美しい大正建築が在り続けるのは、先人達のものづくりの魂と、大阪人の熱心な議論と活動があったからだ。

建築人 4 2013

監修 公益社団法人大阪府建築士会

建築情報委員会

編集 建築情報委員会『建築人』編集部

編集人代表 米井 寛

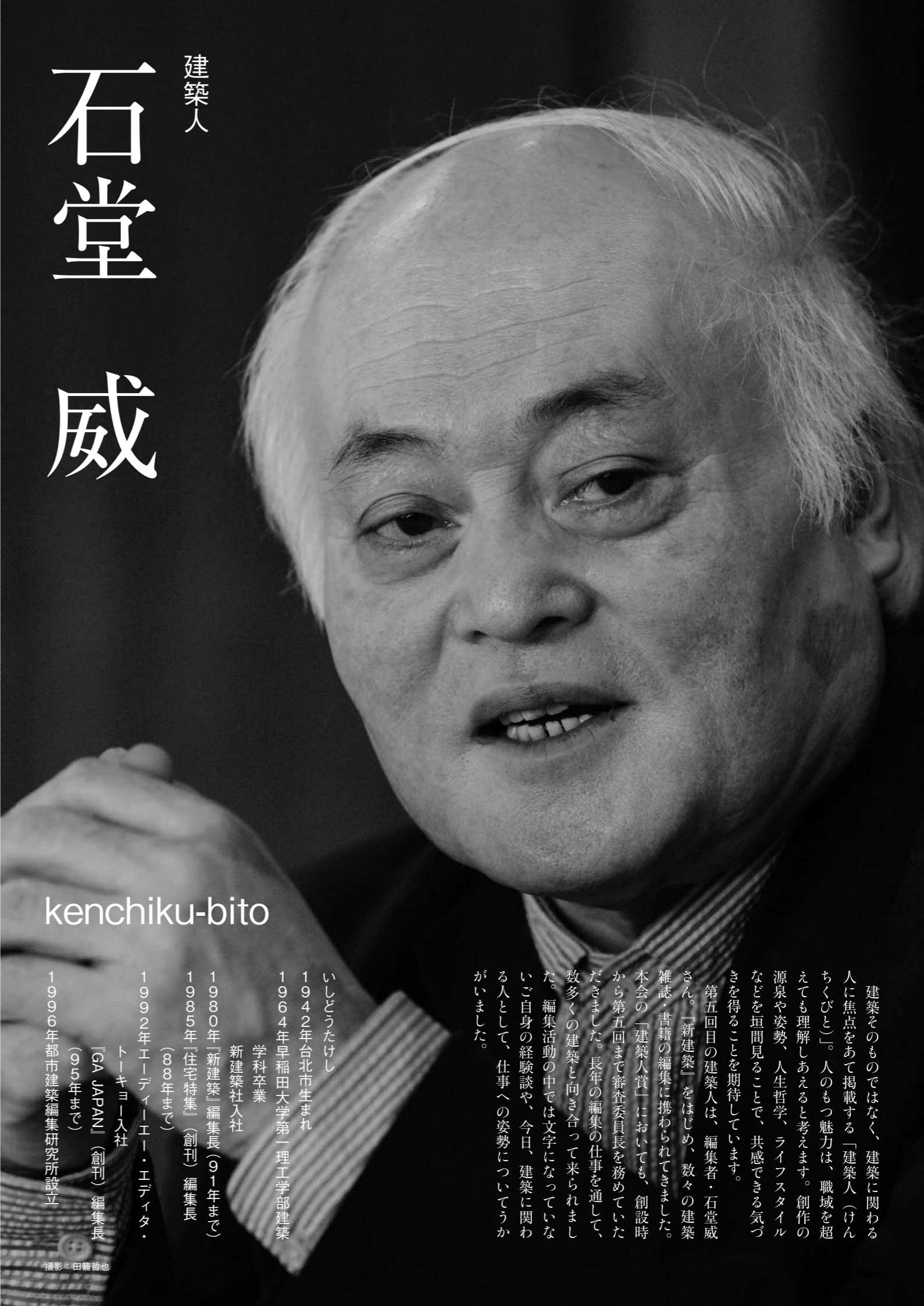
編集人 荒木公樹 曾我部千鶴美

筑波幸一郎 中江 哲

橋本頼幸 牧野高尚

事務局 山本茂樹 母倉政美

印刷 中和印刷紙器株式会社



石堂 威

建築人

建築編集者の道へ
北 今回の「建築人」はこれまでとは違い建築家ではなく、編集者として長年活動されてきた石堂威さんにお話を伺います。石堂さんは早稲田大学の建築学科を卒業されていますが、編集者として新建築社に入社されたきっかけからお話いただけますか。

石堂 私は大学に入学した時点では何となく建築を選んだだけで、けっして熱心な学生ではありませんでした。早稲田大学には坪田譲治さんなどを先輩にもつ「早大童話会」（注1）というサークルがあつて、そこに所属していました。そこに所属しようと思つたのは、元来文系向きの人間だったからでしょう。建築学科ではいわば変わり者だったわけですが、面白いことに同じサークルの後輩で、法学部を出た亀谷信男さんは彰国社に入り、「ディテール」と『建築文化』の編集長をつとめました。当時は、就職は夏頃から決まっていたのですが、私は大学四年の後半になっての方針が定まらないという状態でした。建築学科の事務室から「どう考えているんだ」と言われ、自分の興味について話したところ、紹介されたのが新建築社でした。本を作ることに興味があつたので、まずアルバイトというかたちで行って、なじみそうだなと思つて、すんなりと入っていました。

「四〇周年特集号」での「戦後一〇年史」との出会い

石堂 一九六四年四月に正式に入社しました。一九六四年というのは東京オリンピックがあつた年で、一〇月一〇日の開幕に向けて、すでに『新建築』の「オリンピック特集号」（注2）が動き出していて、私もその流れに巻き込まれていました。オリンピック施設の一部分工事は開幕直前までかかっていたので、通常の日程であれば一二月号がやつとだったのですが、一〇月号として出すことが至上命令で、それは大変でした。しかし思い返すと、同じ年の六月号が『新建築』の創刊四〇周年に当たつていて、私は入社して直ちにこの「四〇周年特集号」（注3）の実務にぶち込まれ、とにかく嵐のような忙しさの中で社会人としての毎日が始まりました。たまたま私が入社した年に記念的な号が続き、たぶんこのしんどい時期を体験したことが、のちのち、通常号だけでは物足りない気持ちに膨らませることに繋がつたように思います。

この「四〇周年特集号」は、戦後二〇年ほどに当たり、高度成長まつた中で、経済復興を遂げて社会の基盤整備が揃いつつあつた頃で、それまでの建築界の総ざらいをやるうとしたものでした。北 「四〇周年特集号」については事前

に拝見しましたが、非常にしっかりした量の文章が掲載されていました。石堂 当時の第一線の評論家や歴史家、西山卯三さん、浜口隆一さんをはじめ、神代雄一郎、村松貞次郎、山本学治、佐々木宏といった方々に論文を書いていただいています。西山さんには戦後、『新建築』が復刊したときにも二号ほど特集で担当していただいています。

今のグラフィカルな誌面と比較すると「よくぞ…」と思うくらいに文字の多い、堅い調子のものでした。当時はそれだけ、言葉や思想を大事にする気分がみなぎつていたのですね。明治以来行われてきた日本の建築の近代化、その確認を誌面に落とす作業が仕事だったので、編集実務を学びながら、同時に、私はここで肝心な、「建築とは何か」を仕込まれたのだと思います。

そのとき編集部は、建築作品と建築界と社会の出来事を内容とした簡単な四〇年史を自分たちも綴ろうということになり、全員が分担してやることになりました。二四頁程度のものでしたが、私にはたいへん勉強になりました。私にはたいへん勉強になりました。ちょうど私は戦後の復興期に関心があつたので、そこを担当したんです。

そのときに「戦後一〇年史」（注4）という当時の編集長・川添登（注5）さ

建築そのものではなく、建築に関わる人に焦点をあて掲載する「建築人（けんちくびと）」。人のもつ魅力は、職域を超えても理解しあえると考えます。創作の源泉や姿勢、人生哲学、ライフスタイルなどを垣間見ることで、共感できる気づきを得ることを期待しています。

第五回目の建築人は、編集者・石堂威さん。『新建築』をはじめ、数々の建築雑誌・書籍の編集に携わられてきました。本会の「建築人賞」においても、創設時から第五回まで審査委員長を務めていただきました。長年の編集の仕事を通して、数多くの建築と向き合つて来られました。編集活動の中では文字になつていないご自身の経験談や、今日、建築に関わる人として、仕事への姿勢についてうかがいました。

kenchiku-bito

いしどうたけし
1942年台北市生まれ
1964年早稲田大学第一理工学部建築学科卒業
新建築社入社
1980年『新建築』編集長（91年まで）
1985年『住宅特集』（創刊）編集長（88年まで）

1992年エーディーエー・エディタ・トーキョー入社
『GA JAPAN』（創刊）編集長（05年まで）
1996年都市建築編集研究所設立

んたちがまとめた『新建築』の特集号に出会いました。その特集号を見て、建築家の作品を次々と紹介していくだけではなく、雑誌が歴史を紐解きながら過去の作品も取り上げて再記録していくことができる、その方法を知り、そこで改めて関心を持ち直して、編集の世界にググッと入っていききましたね。

編集員全員解雇事件

石堂 「戦後一〇年史」では、編集は、川添登さん、平良敬一さん、宮嶋関夫さん（注6）となつていますね。川添さんはご存知だと思いますが、平良さんと宮嶋さんはその後、創刊された『建築』（注7）という雑誌に移られました。それは「戦後一〇年史」を出した二年後のことです。一九五七年に編集員全員解雇という事件（注8）があつたのです。この事件の前に宮内嘉久（注9）さんも編集部に加わっていました。

北 このことについては最近知りましたが、それをきっかけに編集の方針というのは変わったのでしょうか？

石堂 随分変わりましたね。以前は、川添さん、平良さん、宮内さんは自分たちのペンネーム（注10）を持っていて、編集者であると同時に評論家的な動きもされてきました。編集の仕事をやっていると評論的なものに気持ちが向いていくの



上段 「戦後10年史」（1955.8）表紙
下段 有楽町そごう（現・ビックカメラ有楽町店・村野藤吾設計1957年）

（注1）1925年創立の童話・児童文学の研究や作品発表を目的とした学内サークル。多くの児童文学作家・翻訳家・脚本家・編集者などを輩出している。通称・童話会。
（注2）オリンピック特集号「新建築1964年10月号」「新建築社」
（注3）40周年特集号「新建築1964年6月号」「新建築社」
（注4）戦後10年史「新建築1955年8月号」「新建築社」
（注5）川添登：1926年生。早大理工学部建築学科卒。新建築の編集長を務める。退社後は建築評論から民俗学に至る分野で活躍。メタボリズムに参加したほか、万博にも尽力した。
（注6）平良敬一：1926年生。1950年「国際建築」編集部員、1953年「新建築」へ移籍。「建築知識」「建築」「SD」「都市住宅」「住宅建築」「造景」など多数創刊に携わる。
（注7）「建築」1960年創刊。創刊時編集長は平良敬一。1976年休刊
（注8）新建築1957年8月号において村野藤吾設計の「有楽町そごう」に対して批判的な記事が掲載された。その結果、村野氏とも親しかった社主・吉岡保五郎の怒りを買ったこととなり、編集員全員が解雇されたという事件。
（注9）宮内嘉久：「THE JAPAN ARCHITECT」1956年創刊を担当。後に「国際建築」「建築年鑑」などを編集。大谷幸夫らと五期会を設立。
（注10）川添氏が岩田知夫。平良氏が葉山和夫。宮内氏が灰地啓。他誌を含めて執筆活動を行っていた。



新建築
 10月号臨時増刊号
 日本近代建築史再考
 建築の領域

1	5	29	30	31	62	73	87
2	16	30	31	32	63	74	88
3	18	32	33	34	64	75	89
4	19	33	34	35	65	76	90
5	20	34	35	36	66	77	91
6	21	35	36	37	67	78	92
7	22	36	37	38	68	79	93
8	23	37	38	39	69	80	94
9	24	38	39	40	70	81	95
10	25	39	40	41	71	82	96
11	26	40	41	42	72	83	97
12	27	41	42	43	73	84	98
13	28	42	43	44	74	85	99
14	29	43	44	45	75	86	100

Building Architect Article

上段 墨記念館（丹下健三 1957年）
 下段 「日本近代建築史再考」
 （1974.10）表紙

（注11）日本近代建築史再考「新建築」1974年10月臨時増刊「新建築」社

は自然だし、実際この時代は思想がにぎやかなときで、その渦の中に入っていくのはよくわかることです。

しかし、設計の実務に就いている建築家からすると、仕事に役立つ情報がほしい。だけど、そこにはあまりいかずに一方に片寄り、それが激しくなっていた。そういう中で事件が起きたのです。

事件後は方針が変わり、論調的なものは少なくなり、完成した建物を淡々と紹介するという内容が変わっていききました。しかし、そこが面白いところで、逆に読者が増えていったのです。朝鮮戦争を契機に景気がよくなって、建築家にどんな仕事が出るようになり、さまざまなものが建ち出した。そうした社会の動きが雑誌に出てくるようになり、『新建築』は必要な情報源だと思われたのでしょう。雑誌としては物足りなさはあるが、しかし必要な情報が載っている、と。

今の『新建築』も、この時の方針が基本にあると思います。私が入社したときに言われたことは、「編集者というのは相撲でいえば『呼び出し』であり、『行司』ではない。行司は読者なんだ」と。編集者は個人的な意見はそれぞれあっても、時に応じてそれを表明することはあるにしても、誌面上ではそれを主張することはない。

森本 編集方針が変わって、それに物足

歴史家との協働

石堂 「日本近代建築史再考」の頃は、建築の歴史家と編集部との関係が非常にうまくいってました。戦後、日本が復興を目指して、みんなが意気高揚し、専門を超えてリンクしていろんなことを考えた時代でした。今は結構バラバラではないでしょうか。当時は、村松貞次郎さんや小能林宏城さんに「建築明治一〇〇年」（注12）という連載をお願いしていて、常に歴史を感じさせるものを掲載してました。読者側も雑誌は、作品とそれに因んだ記事だけではないんだという認識がごく自然にあったと思うのです。当時、『建築文化』にしても、同じような歴史ものの企画がありました。「近代の呪縛に放て」（注13）だとか。近代をもう一回見直そうという時代だったと思います。

「一〇一」の意味、みんなで考える森本 「日本近代建築史再考」を拜見すると、石堂さん自らカメラマンについて大阪にも来たを書いておられましたね。一〇〇選でしたか、全てに行かれたのですか？

石堂 「一〇一」ですね。全部は行きませんでした。東京をそんなに長く空けることをできなかったから、分担して取材しました。でも、かなり、このときに行っ

りないという読者も出てきた結果、他の建築雑誌が伸びてきたということはあるのでしょうか？

石堂 わかりません。「新建築」の方針転換を批判して、他雑誌を応援するとか、『新建築』に作品を出すのをやめるといふボイコットを行った建築家もいました。例えば丹下健三さんもそういう時期がありました。墨記念館（現・墨会館・一九五七年）は『新建築』には掲載されておらず、『建築文化』に掲載されています。編集部はその状態が長く続くことがいいとは思っていなかったのですが、丹下さんに働き掛けて是正していったのですね。中には尾を引いた方もいたようですが、早晩、解消していったようです。

ですから結果的には、いろいろな情報が違う形で誌面に現れるようになりました。例えば地方からの情報がずいぶん載るようになったり、組織設計事務所や建設会社設計部の仕事も、この時に掘り起こしがなされたと思います。全体として作品の情報がどこからも上がってくるようになって、状況としては日本全体の動きがつかめるような誌面になっていきました。

編集員全員解雇事件で触れておいてもよいと思うのは、解雇そのものは当事者にすれば大きなことですので軽々に語れないことですが、結果からすると、当事

て見ました。「一〇一」としたのは、本当は一〇〇点だけでも、必ず見落としがあるわけだから、一〇一は一はあなたのものですよという意味で、一〇一にしたのです（笑）。掲載している数は一〇〇です。北 現在、雑誌を作る中でこれほど編集者と歴史家が緊密な関係を築きながらやっているといるのはあまりない気がするので。

石堂 そのような状況は非常に残念だと思っています。でも、原因があってそうなったのでしょね。「みんなで考える」ということが薄れているのではないのでしょうか。しかし、3・11が起こり、今の日本はいろんな問題を抱えています。そこはもうみなさんが背負う問題だろうと思います。

河野 みんなで考えるというのは、昔は、個人で、論文などそれぞれの著者が書いたものを集約したという感じですが、最近是对談形式というのが多くなっています。対談形式は、みんなで考えるというものには入らないのでしょうか。

石堂 対談も一つの形式だと思えますけれども、編集者自身が、大きな企画を考える、歴史家に加わってもらって何か一緒にやる、という必要性をあまり思わなくなってきたのか、そこまでの切実感がないのか、ちょっと分かりませんが、大きな

者たちのその後の優れた社会的活動をみると、よかったのではないかと思えます。核分裂みたくに各自のポテンシャルを生かし、それを拡げて社会に貢献されてきましたから。

時代の転換点を読む

森本 一九七〇年の大阪万博から四年後に、今度は「日本近代建築史再考」（注11）という特集が組まれています。華やかな誌面と、「日本近代建築史再考」の表紙もおどろおどろしい紫と黒でしたが、コントラストがとても印象的です。石堂 通常号は、掲載作品の中から一つ選んで、それを表紙に使うわけですが、特集号は、特別にデザインしてもらいます。これは亀倉雄策さんのデザインで、グラフィック・デザインの御所でした。四〇周年特集と同じように、村松貞次郎、近江栄、山口廣、長谷川堯という四人の歴史家に監修者となっていたら、論文を書いてもらいました。

荒木 一九七三年というのが私としてはターニングポイントになっていてと思います。戦後住宅の着工件数が一番多かった年が一九七三年ですが、そこから右肩下がりになっていく。一九七四年というのはちょうど時代が変わる時なんですね。石堂 そうです。少し話は戻りますが、

問題提起をしていないなというのは感じます。森本 楽しんでるといったら語弊があるのですが、まず磯崎新さんが近代建築を熱く、かなりの労力で分析されているのが伝わってきました。そういった意味でも編集者と磯崎さんたちとの関係性もとても良かったと思えました。

石堂 ええ、そうですね。磯崎さんは歴史にも詳しい。歴史家よりも詳しいところがある（笑）。というよりご自分の推論を立てるんです。作家らしくね。たとえその推論が間違っているとしても、そのほうが非常に興味深く感じられるとかね。その点、歴史家は事実をきちんと押さえていかなければいけない。建築家は思うことを組み立てていける自由さがある。そういうところで歴史家も刺激を受けたし、

いい関係だったと思うのです。「日本近代建築史再考」では、歴史家だけの作業に終わらせたくないよねという話を編集部でして、じゃあ建築家もかませよう、誰がいいだろう、と。それで磯崎さんに話をしたら、面白い、乗ろうということ。磯崎さんのコーナーができました。それが「デザインの刻印」という部分で、磯崎さんが歴史家の鈴木博之さんとペアで担当するということになりました。

歴史家たちが進めてきた作業について

高度経済成長が一九七〇年の大阪万博に向けて続き、一九六〇年代半ばから超高層ビルなど、大型のビルができていきました。皇居お堀端の「パレスサイドビル」が一九六六年、超高層一号の「霞ヶ関ビル」が一九六八年。ちょうど、今の中国みたいにい急激に日本が動いていった時代ですね。今、中国で起きている公害問題が、日本では一九六〇年代後半から始まって、一九七〇年代に入ってからピークに達していくわけです。

この特集号は、一九七三年の初めに企画開始。まだタイトルや内容の方向性が定まらない段階で、まだまだ高度成長が止まるとはだれも考えない中で始まりました。ところが、ここが雑誌編集の醍醐味なんです。この年の一〇月にオイルショックが起こりました。それまでに進めていた内容を放擲し、急遽、企画の見直しとなり、テーマが「日本近代建築史再考」と定まったのです。つまり企画を立ち上げた時は「再考」というところに焦点があったのではなく、「近代化の中の建築界再点検」ぐらいだったと思います。オイルショックが生んだ建築史における視点の大転回、歴史認識の切り替えが明示された時でした。そしてその認識が監修者と編集部との共有のものとなりました。

ちよつと説明しますと、幕末から明治、大正、昭和という時代の流れの中に西洋の様式が入ってきて、伝統的なものと混じり合いつつ、何となく序列化された見方、固定化された価値観が生まれてきた。それらの背骨の中心にはどうやら縦軸、進歩軸の思想が確固としてあって、オイルショックがもたらした横軸の歴史認識とは違う、とりあえずすべてを一旦ご破算にしてみよう。とにかくテーブルの上全部をばらけさせて、その中から「進歩軸」ではなく「充実軸」で拾い上げてみよう。建築作品、建築論文、建築家、それぞれを「一〇〇」選んでみよう、と。それが、それぞれの「一〇一」で、コンセプトとなり、各自の論文が出来ていきました。

臨時増刊号について

北 その後、臨時増刊号が続きますが、特集号や臨時増刊号の反応などについて教えてください。

石堂 『新建築』は月刊誌の中で「オリピック特集」や「万博特集」（注14）などの特集をいろいろやってきて、それはやはり売れるわけです。ならば、と経営者は、特集号を臨時増刊としてプラス一冊、と考えたわけです。その第一号が「日本近代建築史再考」で、これは版を重ねました。堅い内容でしたが、これが

上段 パレスサイドビル（日建設計・林昌二 1966年）
 下段 霞ヶ関ビル（山下設計 1968年）

（注12）連載・建築明治100年「新建築」1966年6月号～1968年1月号「新建築」社
 （注13）近代の呪縛に放て「建築文化」1975年11月～1977年10月号「新建築」社
 （注14）特集EXPO'70「新建築」1970年5月号「新建築」社



上段 「昭和住宅史」表紙
中段 聴竹居（藤井厚二設計 1928年）
下段 岡田邸（堀口捨己設計 1934年）

〔注15〕建築昭和史「新建築1975年12月臨時増刊」新建築社
〔注16〕昭和住宅史「新建築1976年11月臨時増刊」新建築社
〔注17〕馬場璋造:1935年生。1959年新建築社入社。1971年より取締役編集長。1990年(株)建築情報システム研究所設立。プロフェッショナルアドバイザーとして数々の設計競技に携わる。
〔注18〕吉岡保五郎(1888-1972):新建築を創刊。のちに吉岡文庫を設立して建築関係の育英事業に尽くした。

売れたということ、自信を深めたところもありました。そこで、臨時増刊号を毎年一冊作ることが決まったのです。

また戦後、「新建築」が復刊を果たして安定してきたところで、「新建築」の内容を海外に向けて紹介しようということで、「Japan architect (ジャパン・アーキテクト、後に「Aと改名)」という英文版が月刊で作られました。川添さんたちの時代です。この英文版を作ったことで日本の建築家の作品、デザインが海外に発信されるようになりました。これによって海外でも日本の状況がわかり、内外の建築家も知られるようになり、内外の建築家が気楽に話をする事ができるという環境がつけられたのです。この「Japan architect」は目に見えない大きな働きを建築界にもたらしました。ただし、雑誌社としては経営的に苦勞していました。

第一号の翌年一九七五年は佐々木宏さんの監修の下、臨時増刊「建築昭和史」〔注15〕を出しました。創刊したときからの『新建築』の五〇年間を一冊にといいとで、ダイジェスト的な編成になっています。

その翌年は「昭和住宅史」〔注16〕をまとめ、それなりの評価を得た記憶があります。監修者は横山正さんで、取り上げる住宅の選者でもありました。それ

「野武士」の誕生―編集長代理から編集長へ
石堂 一九七九年、当時編集長だった馬場さんが病気で倒れ、急遽、「とにかく代わりにやれ」ということで私が編集長代理をすることになりました。手配が済んでいた次号はよかったです。次々号は自分で考えないといけないということになり、ちよど若手の作品が集まって来ていたのと、横文彦さんが東京大学の教授になったという話も耳にして、一冊全部を使って横さんに若手建築家の作品批評をやってもらおうと考えました。

横さんのところへ相談に行ったところ、最初は、とうてい無理だと言われてしまいました。でも翌日「やってみましょう」という電話をいただき、横さんが夏の暑い日にご自分一人で作品を見て歩いて、書いてくださったのが「平和な時代の野武士達」〔注19〕です。海外では建築をよく見てきたが、国内の建物はあまり見えていないので、と言われた時はホッとしましたことを覚えていきます。たぶん、これから学生と接していくうえで必要なことと思われたのではないのでしょうか。

一九七九年一二月号では、一九七〇年代の終わりの号ということで、日建設計の林昌二さんに巻頭の文をお願いしました。「歪められた建築の時代」と題された中に、学園紛争から始まり、社会的暴



に、四編の作家論を組み込みました。藤井厚二論を小能林宏城さん、堀口捨己論を磯崎新さん、吉村順三論を林昌二さん、篠原一男論を伊東豊雄さんに執筆をお願いしました。藤井厚二の聴竹居（一九二八年）は、このときは歴史の中に埋もれていて、藤井厚二著の「日本の住宅」を頼りに京都・山崎の山を、横山、小能林、私の三人で探しまわり、ようやく見つけました。こうした発見は楽しかったですね。

藤井厚二さんは京大教授に招かれる前、竹中工務店の初代設計部長をされていましたから、当時、常務取締役であった岩本博行さんに「発見」の話をしたら、ぜひ見たいということでご案内したことがあります。

先ほど、磯崎さんの推論の話をしましたが、磯崎さんはこの「昭和住宅史」で、堀口さんの作品、例えば岡田邸（一九三四年）を取り上げてたいへん興味深い「堀口捨己論」を書かれました。岡田邸は、洋風と和風の部分を、融合ではなく、接合して合体させた面白い作品で、それを磯崎さんが分析された。しかし後から資料が出てきて、磯崎さんの推論は基本的には違っていた。ところが、それが明らかになくても、磯崎さんの推論のほうの魅力でした（笑）。推論を読むことで、逆に岡田邸を意識する、認識するわけで

力の横行、三菱重工ビル爆破（注20）に象徴されるビル防衛の時代に入ったことを沈痛に思う心情が綴られています。一九七四年に起きた爆破事件からオフィスビルはもちろん、大学キャンパスでさえも次々と閉鎖的になり、市民が街から追い出されるような暗い気持ちになった時代がありました。過去形だけではすまない、現在にもつながっている社会の現実がいろいろあります。こうした指摘を誌面のどこかに記録しておくことの必要性を時々思います。

データを揃える
石堂 「野武士」の一〇月号が発刊されたあと、編集長を続けてやれということになって、一九八〇年一月号の企画では、それまで漠然と思ってきたことをやってみようと決心しました。まず、論文という形式は残しつつ、一方で、話し言葉を生かしたインタビュー形式を取り入れようと思いました。論文というのはやはり堅いですよね。建築家の中にも、書くことを厭わない人、話すのはいいけれども書くのは苦手という人、さまざまです。いろんな人に登場してもらいたい、もっと気軽に発言してもらいたい。そこで話を聞いて編集でまとめるという形式が出てきました。もう一つは、建築のデータをきちんと記録することでした。

す。そのように、磯崎さんの論には人を引きつけるものがありました。誤解は誤解でいいんだ、誤解をものともせず前に進んでいく、それでよい、とね。

臨時増刊号での苦勞
石堂 臨時増刊は、最初は年に一冊だったのですが、それが年に二冊になった時もありました。毎月の月刊誌をこなしながらでしたから大変でしたが、それでもなんとか出来たのはスタート時のしんどかった経験があったからだと思います。付き合わされたスタッフたちはよく耐えたと思います。

私が臨時増刊に積極的に関わる中で感じたのは、バックナンバーを見るとほとんどデータが揃っていないということでした。かろうじて設計者名と施工者名、竣工年、場所ぐらいで、それすら定かでないものがままありました。戦前も、戦後もそうです。雑誌に掲載された時期がほしい完成年だとしても、実際、竣工年と発表年とは違うことも多い、それを確かめるのに時間がかかり、建物の完成時期を特定することは簡単なことではありませんでした。いろんな協力者がいるはずなのにその記録もない。後で整理したり利用しようとするときにきちんとしたデータがないというのは、いつか解決しないとけない問題だと思いました。

そのようにして、一九八〇年一月号では、村野藤吾さんの長めの語り「社会的芸術としての建築」が話し言葉で登場しました。このとき、長谷川堯さんとの対話の中で、「建築家は一%」説（注21）が村野さんの口から出てきました。そして、データ詳細図を作品ページの後にまとめて置きました。

北 矩計図も入っていましたね。
石堂 まだ試行錯誤の時期でした。それまでなぜデータがきちんと記録されてこなかったのかと言いますと、編集者がページをレイアウトしていく上で、すっかりしたレイアウトを志向すると、いわゆるデータというのは余計なもの、邪魔なものだったのです。そこで思い切ったデータを後ろに持つていこう、と。すると、いろんなことが解決できるように思えたのです。しかしここで乗り越えなくてはいけない問題がありました。後ろに必要なデータを集めるにふさわしいページ数を用意できるか、ということでした。つまりページの捻出で、作品を一つか二つ外す決断が必要でした。外してもやるべきだと最終判断を下して、データ欄が始まりました。

データを記入するシートの項目作成も重要でした。まずは何人かの建築家に協力を依頼して、用意した項目に書き込みをしてもらい、何回か試みました。そ

馬場璋造さんとの編集活動

北 石堂さんが編集長になられたのは一九八〇年ということですが、それ以前に実質的に『新建築』を作ってこられた時期というのがあるのでしょうか？

石堂 編集長になる前の一〇年くらいは編集次長としてやっていました。最終的には編集長の承認を得るけれども、自分の判断でかなりのことをやる環境にありました。必要に応じて自分のやりたいことを話し、それが認められれば、それなりに自分で処理できるという自由な気風がありました。

それは、私の前の編集長、馬場璋造さん（注17）は考え方が広く、また柔軟で、だからこそ私なりの活動も許容されたのだと思うのです。全員解雇の事件後、発行人であった吉岡保五郎さん（注18）が名目上編集長を兼ねていたのですが、あるとき馬場さんが編集長を受け継がれました。それと同時に、私の編集次長も始まりました。

馬場さんは外向的でジャーナリスト的な感覚がかなりありで、私は、デスク的なものを得意としていました。もちろん取材も私なりにしましたが、馬場さんが広い動きをされていたので、私はそれを埋めるといふか、編集の実務をかなり行いました。コンビのような関係、といえるのでしょうか。

うして作品を掲載してもらおう個人や組織に、データシートを毎月送るようになり、それが届くと、相手は依頼が来たこと認識するようになりました。そういう意味では一つのメッセージの形式にもなっていて、お互いにはつきりしましたね。それまでは電話で、次号でお願いしますというぐらいでしたから。

まもなく他の各誌もそれを倣うようになり、当時は、あの雑誌もやりだしたな、くらいに思っていたけれども、今から思うと、これはかなりの出来事だったのではないかと思うのです。つまり一九八〇年以降の雑誌は、だいたいデータがきちんとあるようになりました。雑誌だけでなく、事務所の保存ファイルでも、いろいろところで使われるようになりました。これは、発見から発明につながったと思っっているんです。

筑波 石堂さんが作られたフォーマットは、完成形に近いと思います。臨時増刊号を編集する作業で必要に迫られてデータを揃えられたと言われていましたが、まとめるのが好きだとか石堂さんご自身の性格的なものなのでしょうか。

石堂 必要だと思ったら、考え続けるということはありますね。あとはいつも言われるのですけれども、ため込みますね（笑）。パッパツと答えが出てこない。何か悶々としている。

上段 幻庵（石山修武設計 1975年）
中段 中野本町の家（伊東豊雄設計 1976年）
下段 54の屋根（石井和弘設計 1979年）

〔注19〕平和な時代の野武士達「新建築1979年10月号」新建築社
〔注20〕1974年8月30日に東京都千代田区丸の内発生した東アジア反日武装戦線「狼」による無差別爆弾テロ事件
〔注21〕語りの中で、建築は社会的なものであるが、建築家はそれでも1%のものとしてあり、いくら社会化したといっても村野は残っている、と語っている。



上段 「2001年の様式」表紙
構成/篠原一男
中段 「POSTMODERN AGE 1980-1990」表紙
下段 インタビュー時の石堂氏
撮影
下段 田籬哲也

(注22)2001年の様式「新建築 1985年7月臨時増刊」新建築社
(注23)POSTMODERN AGE 1980-1990「新建築1990年8月臨時増刊」新建築社
(注24)建築20世紀PART1「新建築1991年1月臨時増刊」、建築20世紀PART2「新建築1991年6月臨時増刊」新建築社

中澤 何かやっていこうという中で、それをどういうふうに表示したら分かりやすくするかということはずっと考え続けられているだけで、整理したりするのがもともとの本分ではなさそうな気はしたんですが。

石堂 パソコンの画面の中でもいろんなものが並列でパッと並んでいる感じですね。整理しようでいて結構矛盾があるといえますか。残した矛盾の中にまた違う何かが出てくることもある。その空中に浮かせている状態を結構楽しんでるんです。

一九八五年臨時増刊号「二〇〇一年の様式」

石堂 一九八五年には六〇周年特集号で「二〇〇一年の様式」(注22)に取り組みました。入社当時の一九六〇年代はモダニズム礼賛の時代で、「様式」という言葉には強い反発があり、死語にも近い状況がありました。しかし、五〇周年特集号の「再考」で息を吹き返した感があり、一九八〇年代のポストモダンにつながる動きを耕していったと思われる節もありました。西欧の歴史の中で形成されてきた様式、国や地域、民族の中で変転してきた建築のスタイル、それらはモダニズムの世紀を過ぎて二一世紀、未来にはどうあるのだろうか、設問そのものが無意

ができるのではないかと思いましたが、さらに考えたことは、二〇世紀が終わるその一〇年前に出そうと決意したことでした。二一世紀が始まるまでの次の一〇年間に、本を刊行したことによって何か状況を動かせないか、本を通じて二〇世紀の最後、そして二一世紀に貢献できないか、という思いがありました。大ボラに聞こえるでしょうが、結構、真面目に考えていました。しかし、大勢の読者の手にとってもらえたのは事実ですから、もって瞑すべし、です。

筑波 アーカイブすることによって、時代を動かすという行為を促すもの、進め方・見方があることに衝撃を受けました。

『新建築』からの独立―『住宅特集』と『GA JAPAN』

北 石堂さんは、新建築住宅特集の立ち上げに編集長として関わられています。当時のお話を聞かせていただけませんか？

石堂 『住宅特集』は一九八五年の春から季刊を始め、翌年五月号から月刊になりました。『新建築』から住宅作品の全部をそちらに移行させることが原則でした。しかし『新建築』で作品の発表を続けたいという建築家も少なからずいて、悩ましい問題として私に突きつけられました。その象徴的な存在として篠原一男



さんがいました。篠原さんの場合、当初、毎年『新建築』の二月、八月でやっていた「住宅特集号」で作品が紹介されていましたが、やがて通常の号での掲載が多くなり、さらに一般の建築と伍するかたちでの掲載を期待するようになりました。小さな住宅で一般建築と競えることは篠原さんにとって励みでもありました。それが『新建築』ではなく、『住宅特集』に自動的に収録されることは、なかなか受けがたいことのように思いました。最終的には合意していただいたのですが、私にとっては創刊当時の辛い説得になりました。同じ思いを持たれていた建築家もいたと思いますが、承諾され、月刊化が軌道に乗りました。現在の両誌を見ると、『住宅特集』の存在基盤が固まったのか、どちらで掲載するかはあまり問題ではなくなったように見えます。

北 もともと『住宅特集』を独立させようとなったのは、それなりに需要があり、また、住宅は比較的小規模な仕事であるため、若手の建築家の発掘する意味もあつたのではないのでしょうか。

石堂 ええ、元々はそこから出発しています。先ほど話しましたように、川添さんの時代から編集部が変わって読者が広がったのと同じように、『住宅特集』が『新建築』から切り離されることによって読者層が明確になり、住宅設計という特質

味であるのか、陳腐であるのか、悶々としていました。思い切って建築家に問うてみたのが「二〇〇一年の様式」でした。過去のなものと未来的な響きをもった造語をテーマとして、一五年先の建築的スケッチ、ドローイングを求めました。まず国内外の主要な建築家を招待作家として選び、依頼する。同時に、同じテーマで「新建築住宅設計競技」を行い、その入選案を加えて一冊を編むというコンセプトでした。全体の企画には、多木浩二さん、石山修武さんに参画いただき、「新建築住宅設計競技」の審査員には横文彦さん、原広司さん、アルド・ロッシさんにご登場願いました。姉妹誌「a+u」編集長・中村敏男さんの協力も得て行いました。

招待作家七四名、それに応募者が四〇三名に及んだ新建築住宅設計競技からの入選者三〇名を加えて一〇四のスケッチがこの臨時増刊号の内容です。作品の内容、傾向はさまざまで、読者個々がそれぞれ作品に直面して判断するのが適切と考え、まさにそのままに、並置することにしました。一九八五年時点の建築家の思考能力、描写能力などは、ここから窺うことができます。もちろん関係された方々の批評、感想はきちんとあり、とても参考になります。地球上の、いわば、平和な時代を背景に世界の建築家に

を探索できる雑誌に育つことが目的でした。今は、新建築社を支える重要な柱になっていきますね。

この『住宅特集』を発するにあたって二つのことを提案しました。賞を設けること、連載を取り入れること、でした。受け入れられて、賞は吉岡賞として(現在は新建築賞に改名)、もう一つは歴史家、藤森照信さんの「昭和住宅物語」(注25)として登場しました。いずれもまだ足腰の弱かった雑誌を早急に頑強なものへと仕立てる役割を果たしてくれました。藤森さんの馴染みやすい文体はこの連載から始まっているように思うのですが、開始まもなく、藤森ファンが続々と出てきました。

さらに付け加えますと、住宅のデータは作品と近くにあつたほうがよいと判断し、作品ごとの最終に、そして設計者がより見えるようにメッセージも織り込んでみたりしました。

北 一九九二年に創刊された『GA JAPAN』についても、編集長として立ち上げに関わられています。

石堂 「建築二〇世紀」Part 1、Part 2の二冊をやり終えたところで、新建築社の役割は終わったと思えました。二川幸夫さんの『A.D.A.EDITA Tokyo (ハーディー・エー・エディター・トーキョー)』は、海外の建築を海外と日本で紹介すること

に向けて行った一専門誌の企画イベントとしては十分役割を果たせたと思っっています。個人的には、コンペ入選者たちの質の高さに驚き、また篠原一男さんが表紙で見せた問いかけ、林昌二さんの建築理解、横文彦さんの超高層スケッチなど、いくつか鋭いものを感じました。将来にわたってこの号が、何度も紐解かれることをひそかに期待しているのですが。

アーカイブから時代を動かす

北 「ポストモダン・エイジ」(注23)では一九八〇年から一九九〇年のことについて簡潔にまとめられていて、その当時を知らない人にとっては教科書にもなると思いますが、もともとそういう気持ちでまとめたのでしょうか。

石堂 一〇年を一冊にまとめられないか、また次の一〇年をまた一冊に……、それを続けていくと何か面白いことにならぬのでは、と真剣に考えました。でもそうなるのは、と真剣に考えました。でもいかなると次の編集者にバトンタッチして点では無理と思いました。

一〇年を一冊に圧縮することは、消えるものは消え、残るものはクロージアアップされていくのですから、怖いぐらいに明快になります。偶然でしょうか、一〇年間の出来事がほぼそのタイトルの中に包み込まれる感じがして。試みという点

を長い間やってこられていて、最後に、国内の問題を『GA』としても扱いたいという考えがあつて、私が参画することになって『GA JAPAN』が始まりました。

『GA JAPAN』も最初、季刊で始まり、一年半ほどして隔月刊に変わりました。これは、作品を紹介する上で隔月刊がちょうど良い、という二川さんの世界を相手にしてきた目からの判断でしたが、私も異論ありませんでした。

私が二川さんとの話で面白く思ったのは、二川流の新人発掘でした。他の雑誌を見て、そこから自分が『GA』などに取り上げた建築家が二川さんのいう新人だったのです。最初、私をはじめ各誌の編集者が苦労して見いだした人たちの中から、ただ選別しただけで新人発掘というのは虫がよすぎると呆れました。しかしやがて、この両者の判断、異なる考えがあることが日本の建築家を鍛え、世界に伍していけるものを生み出すのだと思うようになりました。両者による二重構造によって、日本の建築界の現在があるのです。

『GA JAPAN』で考えたことは、二川流の新人発掘もふまえてやはり独自の新人の見いだしでした。それに加えて、書き言葉ではなく、話し言葉を徹底して用いていくこと、それにデータの項目も洗

で「ポストモダン・エイジ」は面白い仕事でした。テキストから何から、すべてを編集部の前でやりましたから。

河野 「RC打放しをやめられますか」など主題の問いかけが今現在でも問題提起となるようで非常に面白いのですが、これらテーマはどのようにして生まれたのでしょうか。

石堂 『新建築』には、絶えずいろんな情報が集まってきました。情報が集まってくる雑誌であるが故に、何かやらなくてはいけないという責任感があつたと思います。状況を何か整理しようというのが常にあり、それがいろんな企画につながるわけです。保存の問題を持った作品が集まりそうなので、それらを溜めておいて一冊を考えると、時代の流れが見えてくる。作品を一つずつ丁寧に取り上げることが基本であり、すべてはここから始まるのですが、そのパワーが弱い時には、どうやってパワーアップを図るかが肝心です。

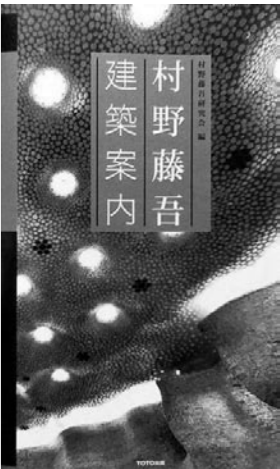
「建築二〇世紀」(注24)は、一九八八年頃、もともと社長の声掛かりで、何かやろうということが始まったのです。そこで思ったのは、『新建築』、『住宅特集』、『a+u』が新建築社内競合しながらあつて、スタッフ数でいえば増えてきたわけです。それを横断的につなげると今までの特集とは違うもっと大きなこと

を洗い加えますと、住宅のデータは作品と近くにあつたほうがよいと判断し、作品ごとの最終に、そして設計者がより見えるようにメッセージも織り込んでみたりしました。

北 一九九二年に創刊された『GA JAPAN』についても、編集長として立ち上げに関わられています。

上段 「住宅特集 創刊号」表紙
中段 「GA JAPAN 創刊号」表紙
下段 インタビュー風景
撮影
下段 田籬哲也

(注25)連載「昭和住宅物語」住宅特集1986年5月～1988年4月」新建築社
単行本として「昭和住宅物語」1990年、新建築社



い直しをしました。

ちょうどこの記事の校正をしているときに、二川さんの訃報が入りました。懐かしく、そして非常に残念に思います。一つ思い出すことは、二川さんが親しみたっぷりの目で茶目つ気をこめて話されたのは、『新建築』で評価できるのはデータのページだけだ、ということとでした。住所が番地まできちんとあって、案内図まであることをしきりに褒めてくれました。

それにはもちろん訳がありました。二川さんは雑誌などで関心を持った建物をひそかに見て回ることをされていました。いちいち建築家の案内を受けるのはまっぴらという方で、だから、住所、案内図があるデータのページは二川さんにとって何より必要だったのです。その話を聞きながら、こういう読者もいたのだと、ひそかに感心し、尊敬したものでした。心よりご冥福をお祈りします。

時間が過ぎて、今では、『住宅特集』や『GA JAPAN』は、思う以上のものに育った、という感じがしています。

村野藤吾氏に対する思い

北『村野藤吾建築案内』（注26）の出版や編集長になられたときの『新建築』の巻頭でも村野さんの寄稿がありました。が、村野さんに対する思い入れがあるのを知り、リティあふれる方です。

これまでの編集の仕事に対する思い奥河 書籍として出版することは、非常に影響が大きいことだと思います。私も大学生のときに『建築二〇世紀』を読んで、それが当時の自分にとってはずべての近現代建築の知識でした。しかし実際には、そこにすべての近現代建築が含まれているわけではなく、出版するまでの過程で、建築の良し悪しの判断や、何を載せるべきかなど、選んでいく作業があったと思います。実際にはどのような編集の仕事を進めていったのでしょうか。

石堂 それについてはぜひ、『建築二〇世紀』Part 2の「編集後記」を読んでいただきたいと思います。編集という仕事の内容、進め方、強弱の付け方、またむずかしさや面白さについても、今いわれたことのすべてがそこにあります。とにかく最善のものをつくらうという思いで、緩みが出ないようにやってきました。

ところで、雑誌の編集を長くやってき



でしょうか。

石堂 村野さんからは所作を含めて直接間接にいろいろ教わりました。村野さんは明治の中期一八九一年に生まれて、大正中期に大学を卒業され、渡辺節の事務所に入り、一〇年くらい勤められ、昭和四年に独立されています。様式建築、近代建築、またデザインの手法など全部呑み込まれていて、一九八四年まで活動されてきました。村野さんほど時代区分を飛び越えて活動されてきた人はいないと思います。関西などの企業の創業家をはじめ多くの信頼を受け、大小さまざまな民間の仕事がありました。そうした建物に自分が身につけた新感覚のデザインを反映させることができました。元赤坂離宮を国の迎賓館への改装という仕事も手がけられて、その中で西欧の建築のカーテンについても研究され、布のデザインを他の建物へも生かしていました。村野さんのデザインは、今も若い建築家への影響があるのではないのでしょうか。たとえば伊東豊雄さんから妹島和世さんにもその影響を感じます。すそ野の広い、偉大な建築家が関西にいらしたということとです。

関西の建築家への取材での思い出

森本 主に東京で活動されてきた石堂さんにとって東京と見比べて、大阪の建築家ということは、作品のふるい落としをおびただしく行ってきたことにつながります。そこに誤りがなかったか、ふるい落としてよかったかどうかは、心の中に残っていることです。どんな仕事も、瞬間瞬間に判断していくことを求められます。それは怖いことですが、判断を下さないといけない。磯崎さんの推論の話をあえて持ち出せば、間違いを起しても前へ進むしかない。その代わり、絶えず自分をチェックすることを忘れてはいけません。それが大切だと思って、ここまで来たということとです。

編集という作業について

荒木 会報誌「建築人」の取り組みなどについて、石堂さんが見られていて思うことを教えてください。石堂 こういう会の活動が続いていくのはいいな、という感じで受け取っています。特に皆さん、ご自分の時間を割いてやられているのがよく分るので、よく頑張っていると思います。会誌というのは、全会員にとって常に有用なものとしてあることは無理な話です。ですから企画編集を担当される方々が、会員の思いをできるだけ想像して、思い切った信じてることをやり抜くことがプラスを生んでいくことだと思います。

小畦 雑誌の編集にしても、建物をつ

の土壌というのはどういうふうに見られていたんですか。

石堂 大阪はもちろん、京都、奈良、神戸、それに阪神間、それぞれ特徴的な伝統をもっているのがすごいところ。それらを背景に個性ゆたかな建築家が輩立っています。渡辺豊和さん、安藤忠雄さん、永田祐三さん、毛綱毅曠さん、高松伸さんなど。私と年代の近い建築家の皆さんとは、ずいぶん会って話をしました。歳は離れていましたが、石井修さんや出江寛さんとは親しくさせていただきました。大阪での取材の時は、「今度、石堂が来るらしい」と大阪の建築家の中で話が広まり、誰のところへ行くとか、自分のところへ来るかどうかということ、皆さんで話されていたことがあったらしいです。自分のところに来ないで、帰ってしまい、がっかりしたと（笑）。大阪の人というのは、率直だし、情熱的だと感じました。今、安藤さんは、国際的にも活躍されて、だいぶ違う世界の人間になった感じがしますが、たとえばこの『建築人』に改めて安藤さんを引っ張り出して、話を聞いたら面白くなると思いますね。やはり、あのパワーを借りない手はないなという感じがします。皆さんの熱意が通ずると、それなりに事態は動くんじゃないですか。

るにしても、まず言いたいこと・伝えたいことがあって、それに関する情報を集めて、どんな材料を使って、それをどう料理していくかが重要ですよ。石堂 もちろんです。でも編集という作業そのものは、皆さんがすでに日常的にされていることだと思います。全体を眺め、メインとサブ、それに順序をつけて、部分をこしらえる。仕事で施主にプレゼンをするときなどでも、その応用をされているのではないですか？ 私の場合、その対象がたまたま雑誌や単行本をつくることであるだけです。皆さんは編集力を磨いていかれるといいと思います。

それに、形にとられずに続けることが大事だと思います。それと、他にもっと作る方法を考えていいかもしれないですね。本当にカラーページが必要なのか、紙を選んで立派に作るのがいいのか、とか。今は、紙のメディアがほとんど少なくなくなってきているから、自分たちのメディアを持っているというのは、ものすごく貴重です。それをもっと楽しんで作っていいと思います。

青木茂氏が感じるもの

荒木 石堂さんが手掛けた出版物に青木茂さんの書籍がかなり見られます。建築再生への取り組みで著名な青木さんとのつながりを教えてください。

石堂 一九八〇年頃、新建築社主催の海外ツアーで安藤忠雄さんに講師をやっていたことがありますが。青木さんはそのときの参加者で、安藤さんから「日本に戻ったら、大分に帰る前に新建築社に行つて石堂に会つて帰れ」と言われたと言って、アポなしで来られたわけです。その時の印象に何かピンと来るものがあり、それ以来の付き合いです。そのツアーで彼は安藤さんに触れて、自分もあやかるうと思つたようです。ツアーでイタリアのカルロ・スカルパの建物を幾つか見たりして、保存の問題を彼なりに感じたのでしよう。彼には会社勤め、親の手伝いから始まり、設計事務所を構えるまでの経験、下積み時代がありました。今の保存・改修の活動は、その当時の仕事全部生きているのです。そして、彼なりに編み出した考え方が「リファイン」というものでした。今は「リファイン」という言葉に変えています。磯崎新さんは大分出身ですが、磯崎さん設計の大分県立図書館（現・アートプラザ・一九六六年）の保存運動にも青木さんはずいぶん協力していました。磯崎さんが

最後に

石堂 今まで自分自身を語ることに、まとめるなどということはありません。なかなかにそういう気にもなりませんでした。これまで当然と思って、意識せずやってきたことが、皆さんの興味を引くことであつたり、私しか知らない重要なことが幾つもあることに今回気が付きました。そしてそれを語ることは一つの義務でもあると思つていました。今日はそういう意味では、よい機会になりました。最後にということとで申し上げたいのは、今日話させていただいたことの多くは、特別号とか臨時増刊号とか、編集の非日常に当たる内容のものです。日常の月刊誌の編集が私の主の業務であり、途中でこの日常を話さねばと思ひながらここまでできてしまいました。これはこれで諸々あり、簡単に言うのはむずかしい。いづれ何かメモすることもあるでしょうから、その時、興味がありましたら読んでください。ありがとうございました。

牧野 今日のお話で、「建築人（けんちくびと）の活動を続ける」という話と「みんなで考える」という話、この二つを大きな宿題として受け取り、自分達も石堂さんのような有名な方に取材される建築家になるように頑張りたいと思います。一同 ありがとうございました。

二〇一三・二二四 淀川邸にて



上段 インタビュー会場 太閤園

「淀川邸」にて
撮影
田籬哲也

聞き手
北 聖志
1976年 大阪府生まれ
2001年 神戸大学大学院(博士課程前期)修了
2001年 二井清治建築研究所
2007年 THINK一級建築士事務所設立
近畿大学非常勤講師

河野 学
1979年 大阪府生まれ
2008年 大阪大学大学院(博士後期課程)修了
2008年 大阪大学大学院特任研究員
2009年 大阪府立工業高等専門学校講師

2013年 京都市住宅供給公社

中澤 博史
1969年 大阪府生まれ
1992年 近畿大学理工学部建築学科卒
1992年 株式会社大建設
1998年 中澤建築設計事務所設立

森本 雅史
1974年 三重県生まれ
1998年 京都工芸繊維大学大学院(博士課程前期)修了
1998年 株式会社東畑建築事務所
2009年 森本雅史建築事務所設立
近畿大学工業高等専門学校非常勤講師

小畦 雅史
1976年 奈良県生まれ
2004年 神戸大学大学院(博士課程前期)終了

2005年 株式会社設計集団
2010年 荒谷建築研究所
2012年 小畦雅史建築設計事務所設立
筑波 幸一郎
1968年 大阪府生まれ
1992年 京都市立芸術大学美術学部
デザイン科環境デザイン卒業

1992年 株式会社大林組
2005年 筑波建築設計工房を設立
摂南大学・京都市立芸術大学
非常勤講師

牧野 高尚
1969年 和歌山県生まれ
1988年 和歌山県立和歌山工業高等学校建築科卒業
1993年 伊東建築計画室
2000年 Atelier PICT設立
奥河 歩美
1976年 兵庫県生まれ
2001年 神戸大学大学院(博士課程前期)修了
2001年 共同設計株式会社
2007年 O+O architects
2010年 空間計画株式会社

本特集責任編集人
荒木 公樹
1971年 大阪府生まれ
1995年 神戸大学工学部建築学科卒
1995年 建築環境研究所
2003年 空間計画設立



上段 「村野藤吾建築案内」
中段 迎賓館中央階段
下段 青木茂著「建築再生へ」
2010年、都市建築編集研究所

(注26)「村野藤吾建築案内」2009年11月、TOTO出版

中国と篠原一男

石堂 威

○ 今年の三月中旬に、中国・南京の東南大学で開催された「篠原一男」をテーマとするシンポジウムにパネラーとして参加してきました。ほかのパネラーは、篠原一男さんが卒業された東京工業大学の教え子たちで、坂本一成さんをはじめ六名、その中には現・建築学会会長の和田章さんも加わっていました。なぜ今、中国で「篠原一男」か？ 私自身、最初、不思議に思ったのですが、中国の今後の建築を考えるうえで見逃せないことと思いい、考えてみることにしました。

一 国家的事業としてオリンピックや万国博も終えた中国は、高層のオフィスビルや住宅棟も大都市に数多く建てられ、すでに建設大国といえます。一方、土地が公有制の中国では個人の独立住宅は基本的にありません。日本では独立住宅の伝統が旧くからあり、近代に入ってから、武田五一、藤井厚二、堀口捨己らによって優れた歴史が築かれてきています。戦後では吉村順三、清家清、増沢洵らによって新たに開拓され、それらを背景に篠原一男の住宅があり、さらに、東孝光、鈴木恂、安藤忠雄、伊東豊雄、坂本一成と続く展開があります。

- 一 奥山信一・東工大教授
 - 二 白澤宏規・造形大学名誉教授
 - 三 篠原研究室とは
 - 四 和田章・日本建築学会々長
 - 五 石堂威・都市建築編集研究所
 - 六 安田幸一・東工大教授
 - 七 坂本一成・東工大名誉教授
- 篠原一男・学ぶべき存在、超えるべき存在
- 私以外は、建築家および構造家で、現在それぞれ独自の活動を行っています。が、今回の講演にあたっては卒業後のご自分の作品も一、二紹介しながら、個々

様子をうかがってみると、中国の大学の中で、こういった日本の小住宅の流れに関心を持ち出している先生や学生が現れているらしいのです。当面、住宅の設計に役立てることはできないわけですが、建築の「空間」を捉えようとしているようです。「空間学」というのでしょうか、そこに中国の一部の方々が焦点を当てたようです。この流れが大きくなると、中国の建築は間違いなく設計大国となるのではないかと密かに思いました。

今回の訪中目的はシンポジウムとそのきっかけとなった『建築 篠原一男』の作品集発刊のセレモニーでした。この作品集には、住宅と非住宅の作品が一緒に納められ、一般図および写真が収録されています。私自身、重宝に思える内容の本に仕上がっています。さらに建築学科の棟の一室で、二十点ほどの模型がつけられ展示されていました。すべて東南大学の建築科の学生たちがこしらえたもので、これらの模型製作を通して、急速に学生たちが建築のディメンションをつかんでいるように感じました。篠原一男の遺作ともいえるべき傾斜地に建つ小屋の十分の一模型もなかなかよい精度でその一群の中にありました。その写真が本の表

に思うところを、しかも篠原一男の全体像が明快に浮かび上がるように語られました。和田さんは、東工大百年記念館の構造設計者の一人であり、その百年記念館の構造的特徴を述べられると同時に、篠原さんに、より合理的解決の方法を進言すると、形に関わる点になると、そこは自分が考えるところだと、と言って退けられた話をエピソードとして披露されました。通訳をされた郭さんも留学生として来日した東工大の出身者で、むずかしい話を流暢にこなす技は大変なものでした。

直接、間接の弟子たちがこのように揃って、師・篠原一男を語ったことは初めてで、それが中国で行われたことの意味がまた重要だと思えます。百〜二百平方メートルほどの住宅設計に研究室総がかりでほぼ一年もかけて研究し、設計する研究室が今の日本にあるでしょうか。それをずっとやり抜いてきた「篠原一男」だからこそ、「篠原スクール」というひと山が築けたのかも知れません。それが今、中国の若い学生に向けて発信されたのです。

三 編集者として私は、篠原さんと密に接してきたことから、雑誌との関係が絶た

紙を飾っています。

二 講演会は東南大学の講堂で行われました。三層のバルコニーをもつ千五百人収容のやや歴史を感じさせる円形の大ホールです。このシンポジウムの企画は日中の関係が悪化する前から始まっていて、今回、不用意な騒動とならないように広告もせず、十分な注意を払って準備が進められてきているようでした。それでも始まる講堂はほぼ満席となり、東南大学と東工大のエールの交歓から、『建築 篠原一男』の本発刊の記念式典へと続きました。展覧会も予定されていました。この秋に順延となったようです。東南大学は、中国の国家重点大学の一つで、特に理科系に評価が高い有数の大学で、建築学科は広いキャンパスの中により環境を保ってありました。

私がシンポジウムで話したことの一つは、世界の中で日本の建築デザインが高いレベルにあるのは、日本の独立住宅についての研究そして設計が明治以来の学問にきちんと取り込まれていて、長くその修練があったこと、戦後にヨーロッパやアメリカの建築家と伍して戦うことのできた証の中に、多くの住宅作家がいたこと、なかでも住宅を唯一、設計の対象

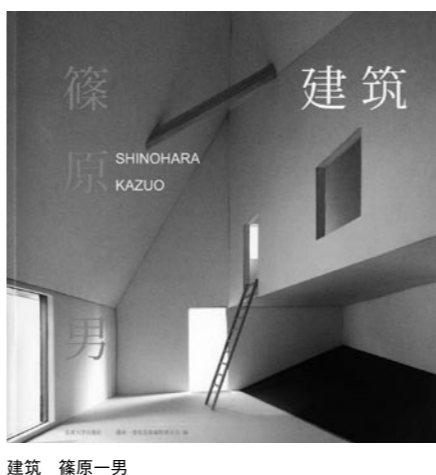
れる寸前の危機がかつて一度だけあったことを思い出し、それを話しました。それはあるところに書いたのでここではあまり触れませんが、いわばそれは篠原さん自身の危機でもありましたが、掲載を断念していれば雑誌存亡の危機にもつながったことを今あらためて思い知るのでした。

それは、篠原さんが日本の伝統を追っていた時期から西欧の合理の思想、そして抽象化に視点を切り替えたときに起こりました。一九七〇年に発表された「未完の家」がそれで、外観の写真掲載もない、内部の亀裂を通して見るホール空間だけが勝負でした。この難局をきわどいところかわかし、両者の関係が成り立って今日があることに、篠原さんの偉大さを感じます。

「未完の家」で方針を切り替え、研究と設計の作業を継続した篠原さんのその後は、「直方体の森」「同相の谷」などとタイトルも一新して、次々とユニークな作品を発表し続けました。傾斜した敷地を取り込んだ「谷川さんの住宅」、コンクリート開放の方杖が二階の空間をよぎる「上原通りの住宅」、高圧線を避けるカーブを建築に取り込んだ「高圧線下の住宅」など一作、一作に新境地を見せ

に選び、「芸術としての住宅」を掲げて果敢に戦ってきた「篠原一男」がいたこと、その存在が大きかったことを伝えようとしたことでした。

ところで、今回のシンポジウムと出版の道筋をつくられたのは篠原さんの弟子、坂本一成さんでした。発端は、坂本さんが退官される前に、東工大で学んだ留学生の願いを受け入れていくうちに、まず坂本さんの展覧会が中国・上海と南京で開催されたことに始まります。この展覧会がそれまで開かれてきたものとは違う雰囲気を持つことを会場にきた人々が感じ取り、広まっていったようです。さらに、『建築的詩学』という郭屹民さんが編集された本が出版されると、言葉の理解も加わり、坂本さんの建築が



建築 篠原一男

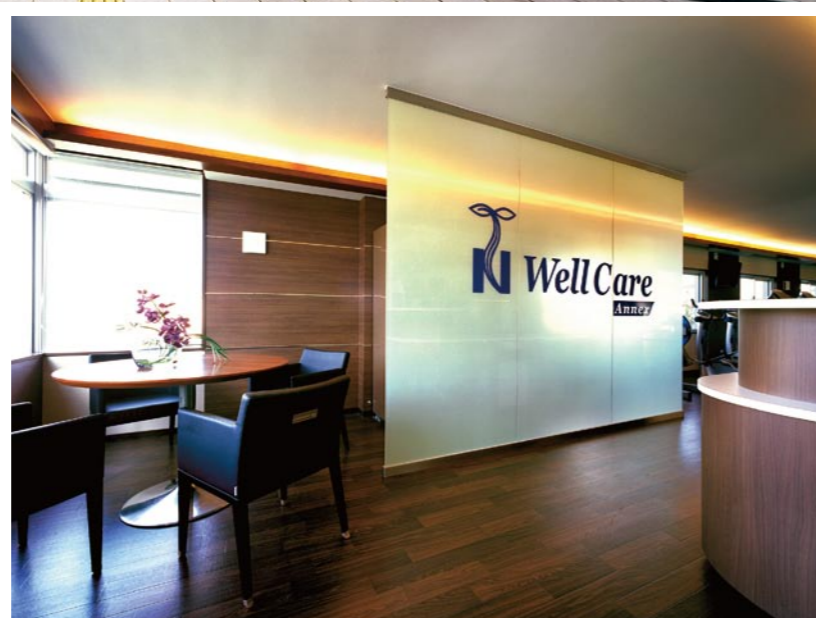
ました。最後に自邸の「ハウス イン ヨコハマ」(一九八六)を旧宅の隣につくり、さらに住宅設計にかけてきた思いを反転するかのように力の総動員をかけて、「東工大百年記念館」(一九八八)を完成させました。総持ちの状態で立ち、やや折れ曲がった長い半円筒形のホールを上抱える異形の姿は、近寄るとその迫力を倍加させます。

壮絶ともいえる戦いの様々が込められた本ができ、中国の方々が「篠原一男」に迫り、乗り越えるきっかけが生まれたともいえるわけで、日本としてもこうした現実を踏まえたうえで、次を真剣に考える必要があると思えました。

篠原さんの中国での展覧会は、現在のところ、南京、上海、広州で考えられていて、時期は今年の秋、また来年の春になるところもあるということです。

1 段目 東南大学キャンパス 講堂前の列
2 段目 講堂内部
3 段目 住宅模型の展示
4 段目 キャンパス内のプラタナスの並木
撮影：石堂威



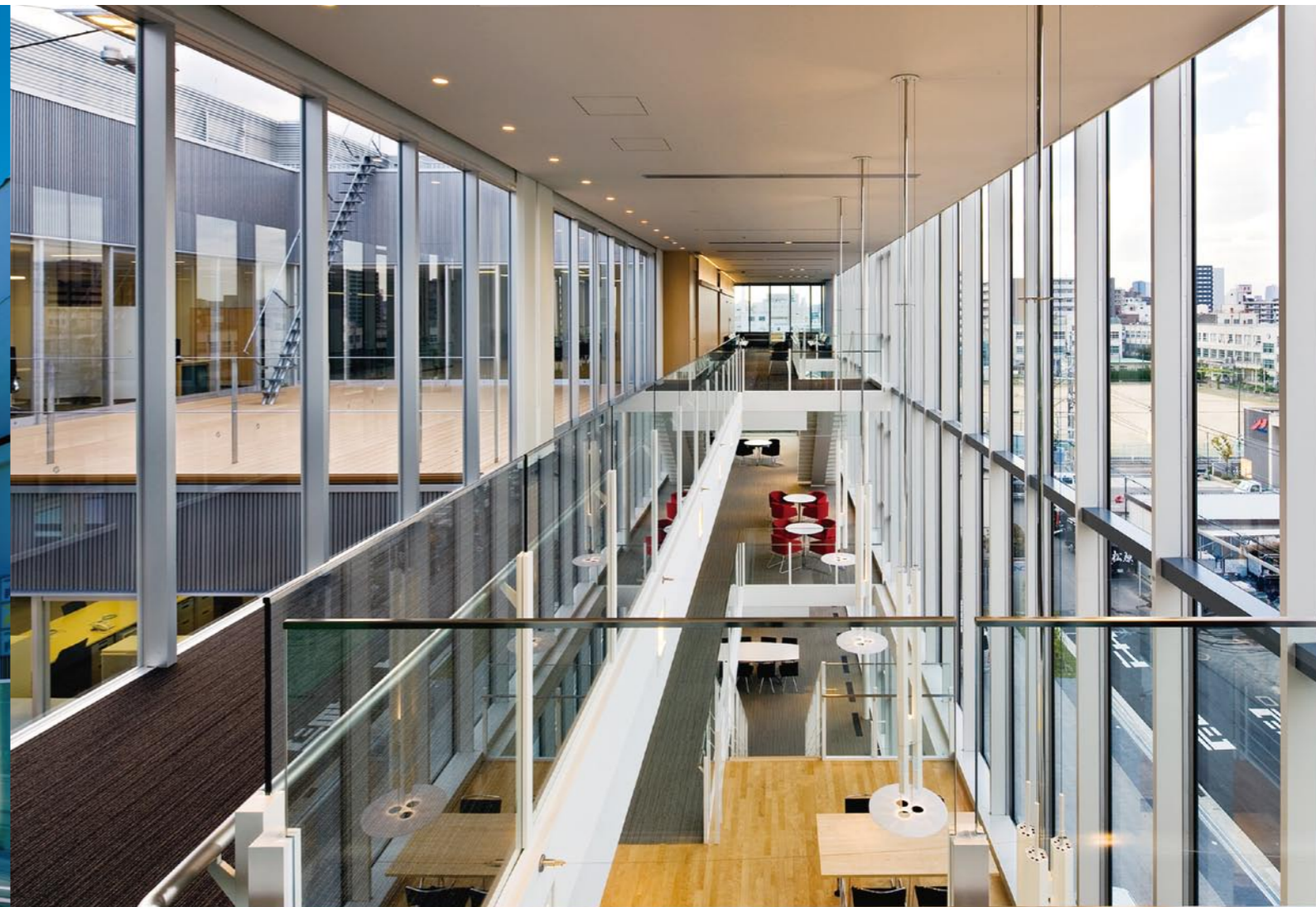


人体の組織は外界と遮断されているのではなく、多孔質の膜やひだのように柔らかく調整しながら繋がっている。この機能を無機質な素材を使って建築に表現したいと考えた。調光、遮音、通風および熱負荷低減などの役割を担うファサードは、高度先進医療を迅速に受けられる身近なネットワークイメージを発信する。地域密着型医療により大病院の負担軽減を目指した新しい安心・安全の形である。

採用された医療機器の高さや荷重に対応しつつ、将来の利用計画にも考慮して、内部はコアと外壁で骨格が構成される無柱空間とした。また医療に根差した積極的な介護予防や健康増進を支える場としても、貢献し続けることを願っている。

(徳岡浩二／徳岡設計)

所在地：兵庫県尼崎市
用途：診療所向けテナントビル
竣工：2012.9
構造規模：RC造 3階建
敷地面積：517.52㎡
建築面積：301.08㎡
延床面積：830.83㎡
写真：川元 音



LED照明の技術開発を続ける照明メーカーの研究所を統合する計画にあたり、創造的なアイデアを育むクリエイティブな研究所を目指した。建物の前面に「コラボフロント」と呼ばれる協業のためのスペースを設置し、社内外の壁を越えた活発なコラボレーションによる新しい価値を創造する場と位置付けた。コラボフロントには吹抜けや階段を設け、ワークスペース間の視線のつながりと動線の機能を一体感のある空間に統合することによって、情報のつながりと融合の機会の創出を図っている。ここでの協業で生まれたローカルなアイデアが他のアイデアとつながり、革新的な技術開発に発展することを期待している。(山田義浩、吉本一規)

所在地：大阪府東大阪市
用途：研究所
竣工：2012.10
構造規模：鉄骨造
地上4階
敷地面積：1,907.44㎡
建築面積：1,055.57㎡
延床面積：3,244.15㎡
写真：名執一雄

第6回 建築人賞

主催：社団法人 大阪府建築士会
後援：社団法人 大阪府建築士事務所協会

『建築人』 Gallery 掲載作品 募集中

会報誌『建築人』では、Galleryに掲載する作品を募集しています。
詳しくは、社団法人大阪府建築士会『建築人』 Gallery 建築作品掲載係まで。

【掲載料】	カラー	2ページ	20万円
	カラー	1ページ	10万円
	モノクロ	2ページ	10万円
	モノクロ	1ページ	5万円
	※モノクロページは住宅作品に限ります		

社団法人大阪府建築士会では
本誌「建築人」の Gallery に掲載された建築作品を対象に
社会性、芸術性、時代性を考慮して、顕彰、公表することにより
建築技術の進展、建築文化の向上に資することを目的として
建築人賞を実施しています。

■ 表彰（設計者に対して）

建築人賞（賞状と記念盾）

建築人奨励賞（賞状）

※建築主・施工者には感謝状授与

■ 第6回 対象作品

「建築人」2013年1月号から2013年12月号まで
Galleryに掲載された建築作品

※建築種別、建築地を問わない。但し、竣工検査済証を受けたもの

■ 審査方法（2段階審査）

一次審査 建築人誌面より選定

二次審査 二次審査資料により選定（現地視察含む）

■ 受賞発表

建築人2014年7月号誌面（予定）

■ 問い合わせ

社団法人大阪府建築士会「建築人賞」係
TEL 06-6947-1961 FAX 06-6943-7103



建築人賞 記念盾 「未来へ！」
ガラスアーティスト 三浦啓子作

気がつけば、日本の都市には今や夥しい数に上る超高層ビルが林立している。でも、考えてみると、その端緒となった高さ一四七mの霞が関ビルが竣工したのは一九六八年であり、四十五年前のことに過ぎない。一方、続いて完成した世界貿易センタービル（一九七〇年）は再開発のために近く解体されるといふ。さらに丹下健三の代表作の赤坂プリンスホテル新館（一九八二年）でさえ、三〇年足らずの短い命で現在解体中である。はたして超高層ビルは都市の環境と私たちの日常生活に何をもたらしたのか、その検証は行われてきたのか、そして都市はどこへと向かうのか。そんな思いから、新宿三井ビルディングに立ち寄った。

「東京海上ビル」は私も優れた建築だと思っている。しかし、あれは経済的に制約のない自社ビルである。表皮の凹凸による採算性の欠除は貸ビルでは許されない。東京海上という豊かな会社の自社ビルという条件と、前川國男という特級建築家の組合わせによって、はじめてなし得るもので、一般性はない。」（郭茂林「青いガラス」『新建築』一九七五年三月号）

えるような市民生活の場をそこにつくり出し、とかく否定的になりがちな超高層ビルを街中に馴染みこませること」だった（村尾成文「建築計画」『新建築』同上）。

訪れると、そう記されたとおり、ミラー・ガラスとダーク・ブロンズ色のアルミのフレームによってメタリックな質感でコンパクトにまとめられた高層棟と、足元に広がる三千mを超える植栽と櫻、赤褐色の床タイルと造形作家・会田雄亮による滝の流れるオブジェなど、温もりのある低層部との

の居住空間の質的向上、低層部の計画自由度の増大による複合空間の合理的計画の可能性の増加と、広場や公園やアプローチといった公共空間の確保、ランドマークや企業イメージの向上といった造形的効果などのメリットをもっている。しかし、高層化が周辺地区に与える日照や電波障害や局地風をはじめとした影響は、高層化すればそれだけで都市環境が望ましいものになるわけではないことをはつきりと示している。むしろ、高層化という手段によってどれだけ望ましい環境をつくり出すことができるかは、これに携わるすべての人びとのこれからの努力にかかっているのではないかと思われる。」

当時すでに、「高層化がすればそれだけで都市環境が望ましいものになるわけではない」との危惧が表明にされていたのである。このような設計の当事者だからこそ気づかずにはいられなかった超高層ビルと都市環境との調整というテーマは、その後にも共有されていったのだろうか。また、この建物の竣工直前には、建築評論家の神代雄一郎による「巨大建築に抗議する」（『新建築』一九七四年九月号）という問いかけに端を発した論争も繰り広げられたが、それは実を結んだのだろうか。今こそ、私たちは林立する超高層ビルの四十五年の歩みを今一度冷静に振り返る地点に立たされているのだと思う。こうして、高層化は「手段」に過ぎず、「望ましい環境」をつくり出すことこそ、それに携わるすべての人間の使命であると明記されていたのだから。

松隈 洋

京都工芸繊維大学教授、博士（工学）。一九五七年兵庫県生まれ。一九八〇年京都大学卒業後、前川國男建築設計事務所に入所。二〇〇八年十月より現職。

記憶の建築

松隈 洋

新宿三井ビルディング 1974年 超高層ビルの公共性



高層部を見上げる



広場を見下ろす

ここに読み取れるのは、徹底したリアリズムによる建築の意味の変質だ。時代は大きく動きつつあったのである。それでも、この先駆的な超高層ビルでは、同じく設計の担当者が記したように、「生き生きとしたヒューマンスペースの創造」が目指されていた。そして、具体的目標とされたのは、「オフィススペースを集約すると共に、高層化によって生み出されるあしものひろびろとした空間を、活気ある親しみやすいものとして計画して、人びとが集い憩い語り合

対比が鮮やかだ。この落ち着いたただずまの広場で、思い思いに過ごす人々には、おそらく高層棟は背景に後退してほとんど意識されないのではなからうか。設計意図は十全に実現され、成熟した都市の風景になっっていると思えた。しかし、それでもなお、同じ文章の末尾は、どこか切実さを含む次のような言葉で締めくくられている。

「建築界で常識化してきている高層化は、建築計画としてみた場合には、高層化部分

不動産経営というより収益性を重視し、機能性と合理性を併せ持つ貸ビルへと、都市の建築が大きく変貌し始めた起点の年だったと言えるのかもしれない。そして、超高層ビルという未だ経験のない技術の総合として成立する建物だからこそ、個人ではなく、組織による設計体制の確立が本格化する。そうした時代背景から見直すとき、竣工時にこの建物の計画担当者が記した次の



ヨーロッパの古い街並みを思い浮かべてみて欲しい。その美しい風景の中に、門扉や手摺り、バルコニー、窓グリのそこかしこに、鍛鉄工芸での建築装飾が、目に浮んでくるのではないだろうか。それら、建築装飾をはじめ、鉄に人が手仕事で働きかけ、様々な生活の用に応じ造り出した鍛鉄工芸全般を指し、ロートアイアンと呼んでいる。

今、私の目の前には、とても大きくて重厚な二冊の本がある。『鉄工芸と建築装飾の世界』と題されたその本は、四百数十ページにも及び百科事典ながらの装丁が施されている。現代に到るまでの欧米での鉄工芸の歴史や、街並みでの様子、さらに日本での事例が、たくさんの美しい写真とテキストで紹介され、まさに建築装飾としてのロートアイアン百科事典と呼べる充実ぶりである。建築装飾における鍛鉄工芸、ロートアイアンをこれ程詳細に、これ程の情報を持つて書かれた本を、私は寡聞にして知らない。しかし、この本の真の評価は、スミソニアン・インスティテュションにアーカイブ收藏されたことが雄弁に物語っている。

この本の著者は、本来ヨーロッパの鍛鉄工芸であるロートアイアンを、我が国で最も早く導入し、建築エレメントとして専門分野を確立した、南澤弘氏だ。今回、南澤氏が率いる、株式会社よし与工房を取材した。ロートアイアンとの出会い、

南澤氏は、京都に九代続いたすだれ屋の



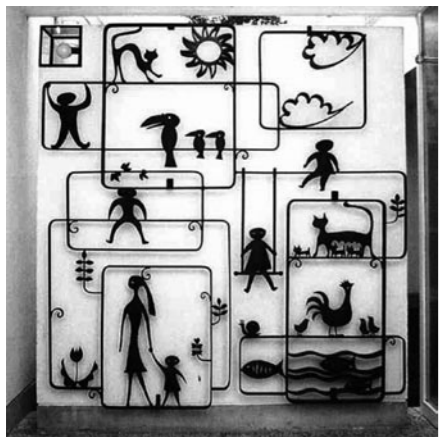
大型のモニュメント、生命の系統樹

め、貧欲に知識を吸収して歩いた。現在とは違い、当時、国内には参考文献も無く、一九世紀末にフランスで刊行された書籍をはじめ、それら文献の全てを海外から、手当たり次第に集めた。その資料は、現在でも日本において、質、量共に超えるものは存在しない。

その時のヨーロッパ紀行をまとめたのが、先に紹介した、『鉄工芸と建築装飾の世界』である。まさに日本のロートアイアンの創成期を切り開いた、バイオニアと言える。

伝統と革新を経て

すだれ屋という日本の伝統的手仕事、戦後の急激な生活様式の変化から危機に瀕したため、新しい活路を求めて掴んだのが、ヨーロッパの伝統的鍛鉄工芸、ロートアイアンであったことは先にも紹介した。しかしその頃、ヨーロッパでは、その伝統の重さや、産業構造の変化などから停滞を招き、閉塞感を抱えていたロートアイアンであったことは皮肉なことであった。とはいえ、ヨーロッパを中心として、その停滞感を何とか打開しようと、新たな才能による様々な試みや、創作が行われていた時期でもあり、それが



伝統に安住することなく、新たな挑戦を続ける

南澤氏の新たなチャレンジとリンクした。紀元前に、中東に端を発した鉄の文化は西方へ伝わり、ロートアイアンとなった。同時に東方にも伝わり、形を変えて日本にも伝わっていた。つまり、形は違えどそれは繋がっていて同じものである。「同じものをどちらから見ると、どの角度から見るとある。」と、気付いた南澤氏は、身に付けたヨーロッパの伝統的デザイン様式を基に、日本人としての感性をロートアイアンを通して表現した。それらの試みは、革新期にあつた世界のロートアイアン界の中で注目を集め高い評価を得ることとなる。中でも室内、パーティションとしての表現は、それまでのヨーロッパなど西欧には無く、日本独自の新しい表現として受け入れられた。

現在、本社工場を京都・亀岡に持つすだれ屋を営んでいた当時の京都市内から、この地へ拠点を移した理由を南澤氏は、「この亀岡の地には、農耕具を作る鍛冶屋が多くいました。そして更に、よし与のもう一つの柱である、食品店舗向けの販促仕器やその籐籠も、この地に昔から受継がれてきた、亀岡の竹箆作りでの伝統技術があつたからです。」と話す。そのどちらもが戦後近代化の流れの中で取り残され、忘れさられようとしていた産業でもあつた。

それら物創りの精神を受継ぎ、新たなデザインを試みることで、新しい価値を与える視点があつたのではないか。それらは、現在、伝統産業とモダンデザインのコラボレーションが広く試みられている、それら試みの先駆けでもあつたのではないだろうか。

匠の技と鉄の記憶

工房を覗いて見ると、フォージユと呼ばれる爐(ろ)の中に火が燃え、並べて置かれ

た鉄の角材が、熱せられて赤々とした光を発していた。その赤々とした光を目にして、何かしら心の奥底から湧き上がってくる懐かしさの様な、心高ぶるようなものを感じた。ちなみにその時の発する光の色で、鉄の軟化具合を探りながら作業を進めるのだそうだ。熱して軟化させた鉄をアンビルと呼ばれる金床の上でハンマーで叩き変形させていく。職人の手にかかると、角材が平らになり、伸ばされ、円く曲げられ、更に曲げて、硬いはずの鉄が見る見るうちに形を変え、ロートアイアンでよく目にする唐草のパーツが出来上がっていった。鉄とは硬い冷たい無機質なものが、というイメージは取り払われ、鉄とは何処か暖かく、人の近くにあり、親しみ深いものであると感じた。

機能としての装飾を取戻す

現在、日本でも広くロートアイアンが認知されるようになり、それと共に、安価な模造品が増えた。価格の高低を言うのはい。「そこには素材が持つ必然性がみられず、文化が感じられない。長い歴史の中で、鉄の素材としての可能性を極限まで突き詰めたロートアイアンという文化を、経済の原理だけで鑄物の型にはめて作るロートアイアン風には疑問が残る。工業製品として高い精度で出来た同じものを並べると、一見綺麗だが出来上がりは不自然だ。同様に、繰り返し繰り返しデザインでも手作業で作られたものには、一つ一つブレがあり、全体として見た時、その手作業ゆえのブレこそが、自然な存在感を生み出すのだ。」と、南澤氏は語る。

そして、バウハウスから始まる機能優先で装飾を排する現代風モダニズムの流れにも疑問を呈する。「装飾はファンクションであ

家に生まれ、その家業を継ぐ。三〇〇年続いた家業ではあつたが、戦後、国内の生活様式の急激な変化から、すだれ屋自体が成り立たなくなった。

新しい道を模索し、独学で絵画やデザイナーの仕事始めた南澤氏は、戦後のかかなり早い時期にヨーロッパへ行く機会を得る。ヨーロッパの歴史ある美しい街並みを歩く中、南澤氏の目に留まったのは、門扉やベランダ、手摺などを装飾する、美しい鍛鉄工芸、ロートアイアンの数々だった。「直感でこれだと感じた。」と語る南澤氏は、ディスプレイ器具の製作をする鉄工所で、鍛冶屋の経験者を集めて、鉄細工の製作を始めた。

そうした中で、ロートアイアンには、ヨーロッパにおける数百年の歴史に裏打ちされたスタイル、デザイン様式が伝統的マニュアルとして厳然と存在することに気付く。それら、伝統的デザイン様式を学ぶため、ヨーロッパ各地を訪ね、スケッチを描き、カメラに収

る。」と、南澤氏は言う。目で楽しむことも機能のひとつである、と。

建築家の内井昭蔵氏は、その著書『装飾の復権』の中で、「人間性を欠いた現代の画一的空間に人間性を回復するためには装飾を復権することだ。」と。また、「装飾とは、付け足しでは無く、材料の持ち味を一番よく見せる形を見出すことだ。」とも語っている。

その観点で見ると、南澤氏が取組み、その思いをしっかりと受継いだ、よし与工房が取組むモノ創りこそが、真の意味での「装飾」であると呼ぶことが出来るだろう。よし与工房の取組むロートアイアンは、門扉やパーティション、手摺り、などの建築装飾金物として馴染み深いものから、屋外大型モニュメントに到るまで多岐にわたる。その全てに流れるものは、伝統的デザイン様式を踏まえた上での革新であり、機能であり、空間に潤いと、豊かさを与えていく意志であると感じた。

今年度からの新連載「建築の射程」では、社会と建築のありかたについて、技術から倫理までさまざまな話題により新しい建築と文化の関係を考えてまいります。

第1回は立命館大学の山口洋典先生にご登場いただき、都住創の現在の問題点から集団運営の持続可能性について語っていただきました。

協同困難なコミュニティにおける協働可能性を求めて

山口 洋典

1975年静岡県生まれ 2000年立命館大学大学院理工学研究博士前期課程修了 2000～06年財団法人大学コンソーシアム京都事務局 2005年大阪大学にて博士（人間科学）の学位を取得 2006年～浄土宗徳興院主幹 2006～11年同志社大学大学院総合政策科学研究科助教授 2011年～立命館大学共通教育推進機構准教授
著書に「京都発NPO最前線」（京都新聞社）、「よくわかるNPO・ボランティア」（ミネルヴァ書房）、「CAFE：創造都市・大阪への序曲」（法律文化社）、「地域を活かすつながりのデザイン」（創元社）、「コミュニティメディアの未来」（見洋書房）（いずれも分担執筆）など。

運動をめぐる参加への問い

「コーポラティブの末路を見ることになると思いますよ」。これは二〇〇七年二月二十二日、CASE／まちづくり研究所の建築家、松富謙一さんと株式会社都住創企画に伺った折、中筋弘子さんから出たことばである。中筋弘子さんは、二〇〇一年に早逝された中筋修さんのご令室で、松富謙一さんは、その中筋さんが取締役を務めたヘキサの元所員だ。当時、築二〇〇年ほどの京町家に住んでいた筆者は、大阪市天王寺区にある浄土宗寺院「應典院」での仕事の都合で、大阪での住まいを探しており、その過程で都住創という活動を知り、知人の松富さんに仲介をいただいで、事務所にお伺いしたのである。

冒頭の発言から一週間後の三月二日、再び事務所にお邪魔した筆者は、その居住を決め、三月二十五日に契約を結び、五月六日から「都住創内淡路町」に住んでいる。都住創とは「都市住宅を自分たちの手で創る会」の略称で、都心に良質な職住空間を共同で設けようという活動である。ただ、都住創は活動というよりは運動と言った方がふさわしい。それは、Wikipediaの日本語版で「コーポラティブハウス」をひくと、「主なプロデューサー会社」の筆頭に掲げられていることを論拠の一つにできるだろう。都住創では、わざわざ自分たちの手で都市住宅を創ろうと思ひ立つ程の人々ゆえ、それぞれに「これがいい」と主張する中、中筋修さんをはじめとする建築家たちが思いを束ね、皆が「これでいい」と実感できる「作品」へと結実していった。

都住創は一九七五年から二〇〇二年まで、大阪では中筋修さんと安原秀さ理の外部委託によって、維持・管理に対する意識に変化が生じてきている」とある。もとより、自主管理を成り立たせしめるためには、組合員間の相互交流が必須である。なぜなら、各々の関係が構築されていない際には、特定の人物への一任という論理のもとで、運営責任への放任が進むためだ。

今、この六年を振り返ると、冒頭で紹介された「末路」発言は、この「自主管理ルールの崩壊」を意味していたと確信できる。コーポラティブハウスは、言わば「住まいの協同組合」であるから、組合員の一人ひとりが自覚と責任を持って運営に参加することが前提であるはずだ。しかしながら、新たな環境を求めての積極的転居にもなう転売や、破産等による消極的売却としての競売など、組合員の世代交代が進む中で、建設組合当初の情熱を携える人々は、総体的に減少する宿命にある。無論、新たな世代が、古くからの世代と共に、自主管理にあたっての使命感を携えていくこともできるだろう。しかし、運動の主宰者を喪失して久しい都住創は、組合員が個々に主張する論理の方が先に立つことにより、システムを支えるルール（自主管理という前提）や、システムを担う人々のロール（適任・不適任であるかの判断よりも輪番で役割を引き受けるという個々の役割）といった居住の哲学が、極めて矮小化されてきていると言えよう。

協働を通じた協同性の回復を

先般、「都住創内淡路町」で、小さな「事件」が起きた。それは、住棟内で共用しているセントラル給湯システム（二〇一〇年までは太陽光を利用）を使

らによる「ヘキサ」が二〇棟を設計し、東京ではヘキサの監修のもと隈研吾さんにより二棟が設計された。筆者の暮らす「都住創内淡路町」は、第一二番目のプロジェクトで、一九八四年五月から十月に計画され、翌十一月から施工、そして一九八六年五月に竣工した。「内淡路町」を選んだのは、数ある都住創の中でも、斜めにセットバックされていくガラスカーテンウォールに、積極的に緑化されている南面の表情に一目惚れしてしまったためである。敷地面積は三五七平米に対し、専有部分の床面積の合計は二、一三七平米、二〇一二年度当初の組合員は一八という規模だが、これも当時の都住創では最大のプロジェクトである。

本稿では冒頭の発言を伺ってから六年を経て、あのことが問いかけたことの意味を、「参加」をキーワードとして紐解いてみたい。なぜなら筆者は阪神・淡路大震災の折、環境システム工学を専攻とする大学一回生だったが、その際、ハードを中心とする土木計画に疑問を覚え、後に社会心理学の一分野である集団力学（group dynamics）を専門とすることにした。そこで、人間関係を専門とする筆者が、都住創内淡路町で何を見聞きし、何に触れたか、そして何に触れられなかったか、述べていくこととする。同時に、それは日本におけるコーポラティブハウスのムーブメント（すなわち、運動）を牽引した、一連の都住創に対する敬意を表することにもなる。

一任と放任のあいだ

都住創については、中筋修・著『都住創物語』（一九八九年、住まいの図書館）用せず、個別給湯器による住戸内給湯を採用する設備工事を行う、というものであった。本来は認められない方法であるが、実はこの案件は、都住創内淡路町では最初のことではなく、完全スケルトンでリノベーションをした別の住戸でも行われていた。相互交流における自主管理がなされていれば、こうした「抜け駆け」は起こらないはずだが、事前に提出された工事届と図面により、工事前に発覚した。本件について、管理組合による緊急の打ち合わせが行われたのであるが、その際には「前例」を御旗として、個の権利が主張されたことで、組合員の一部からは「なぜ都住創を選んだのか」といった問いも投げかけられた。

建築に限った話ではないが、年数の経過に対して、どのように固有の価値を保持させられるかは大きな課題である。ただ、特に集合住宅においては、住戸単位でのスペックの向上だけを考えるとほならないはずである。ましてや、コーポラティブハウスにおいては、世代交代が繰り返されるなかで、いかにして相互交流を後盾とする自主管理というシステムが継承されるか、これは少なくとも大阪・上町台地界隈に二〇棟ある「都住創〇〇」が、それぞれに直面している課題であろう。既に都住創内淡路町は、一部の管理事務を事業者に委託しており、輪番制で就任する管理組合の役員も、組合員としての役割としてではなく、事業者からの要請に応える役割として請け負われている傾向も無いとは言えない。

都住創という運動を牽引し、都心に居住する人々のつなぎ手となった中筋修さんを師とする松富さんは、『師を偲んで』と題する追悼文で次のように述べ

出版局）に詳しい。ただ、同書は絶版である上、バブル景気へと突入する中で実施された一五番目のプロジェクトまでしか言及されていない。よって、都住創とは何かを概括する上では、本稿執筆時点において、日建設計総合研究所のウェブサイトで公開されている第一一六回都市経営フォーラム「コーポラティブ・ハウジングの新たな展開にむけて」の記録（一九九七年八月二十七日・<http://www.nikkei-ri.com/forum/116.html>）が参考となる。ここでは、図らずもバブル崩壊後、都住創とは何だったのかが中筋修さん本人の談で言及されている。

コーポラティブハウスは、建設までのプロセスと、居住の様式（すなわち、スタイル）に注目が集まる。しかし、コーポラティブハウスというのは、都心居住のシステムとして捉えられる必要がある。事実、都住創では住居や職場としたい人々が出資して土地を取得した後に、出資者による建設組合が結成され、竣工後は建設組合のメンバーが管理組合の構成員となる。そして、組合員の自主管理によって、都心居住の価値を維持・発展させていくことが基本的な「制度」（すなわち、システム）とされていた。

ところが、建設から年数を重ねることとて、都心居住というスタイルに対する、都住創における自主管理は、建設当初のルールとして認識はされているものの、最早、都心居住のシステムの構成要素としては捉えられてはいない。実際、二〇〇八年九月の日本建築学会で発表された「都住創における自主管理の特性と変容に関する研究」（鍋島梢ら、大阪市立大学大学院工学研究科・当時）でも、「住み手の高齢化に伴う総会の外部開催、管

ている。「自らの都市や住宅に対する考え方を実践してきたことや超高層都住創の構想そして、都住創の新たな展開を目標む姿は建築家として、又師として、すごく魅力的であった。そういう意味で、マンハッタンに時代の功績を作ったR・M・ハントやA・S・チャーニンと重なって見えたのは、僕だけではないかと思う。むしろそれ以上に、都住創の五〇人も一癖二癖もあるクライアント相手に一つの建物としてまとめてしまふ凄腕は、R・M・ハントやA・S・チャーニンになせる技ではないと思う。」ここで今一度、前掲のフォーラムの記録に目を向けると、中筋修さんは「筋やん」と慕われていたことがわかる。乱暴な言い方だが、建築家が「つくるまで」や「できたもの」に対する責任を負うだけでは、（住むという）手段の（建設という）目的を達成しにすぎないだろう。

近世の時代、長屋の文化がまちを支えた大阪も、今は高層マンションが乱立する都市となった。長屋のコミュニティが「横」に拡張するものに対して、高層マンションのコミュニティは「縦」に広がっている。しかし、そうした縦に広がるコミュニティにおいて、個々の居住者（場合によっては所有者）は、それぞれが構成員であるという自覚や責任を有しているだろうか。もし、そうして構成員どうしの協同（cooperation）の困難さに気付いた人は、それは他人事ながら自分事として捉えた他者として協働（collaboration）の発露に立ち会っているのだろうか。



都住創内淡路町

「都住創内淡路町」建築概要

建築地：大阪市中央区

設計：ヘキサ 施工：モリタ建設 竣工：1986年

構造・規模：SRC造一部RC造・地下1階地上10階

敷地面積：357㎡ 建築面積：297㎡

大阪における「都住創」プロジェクト

1号：松屋町住宅（1977年・住宅15戸・非住宅2戸） 2号：岩井町セブン（1978年・住宅7戸・非住宅2戸）
3号：大手通（1978年・住宅13戸・非住宅1戸） 4号：コープ内平野（1979年・住宅18戸・非住宅1戸）
5号：うつば（1980年・住宅12戸・非住宅2戸） 6号：中大江（1981年・住宅10戸・非住宅3戸）
7号：徳井町（1982年・住宅11戸・非住宅2戸） 8号：石町（1983年・住宅10戸・非住宅6戸）
9号：森の宮（1984年・住宅7戸） 10号：釣鐘町（1984年・住宅8戸・非住宅6戸）
11号：清水谷（1985年・住宅9戸・非住宅6戸） 12号：内淡路町（1986年・住宅12戸・非住宅8戸）
13号：スパイヤー（1987年・住宅5戸・非住宅5戸） 14号：北山町（1988年・住宅12戸・非住宅1戸）
15号：清水谷Ⅱ（1989年・住宅8戸・非住宅3戸） 16号：南田辺（1990年・住宅7戸）
17号：岡山町（1991年・住宅6戸・非住宅1戸） 18号：内平野町Ⅱ（2000年・住宅12戸）
19号：大手前（2001年・住宅47戸・非住宅5戸） 20号：糸屋町（2002年・住宅14戸）



連載第一回

加登 美喜子

一九九三年 神戸大学工学部建築学科卒業
 一九九五年 神戸大学大学院工学研究科
 環境計画学専攻修了
 一九九五年 株式会社日建設計入社
 二〇〇九年 京都大学大学院工学研究科
 建築学専攻博士課程修了
 現在 構造設計部門構造設計部 主管
 構造設計に従事

主な受賞 日本建築学会優秀卒業論文賞・
 優秀修士論文賞
 プレストレストコンクリート
 技術協会賞 作品賞
 日本構造技術者協会 新人賞
 日本免震構造協会賞 作品賞

ひろば HIROBA 建築構造案内

二〇一三年度のHIROBAは、「建築構造案内」と題して、関西で活躍する構造設計者にインタビューし、その人物像や考え方を紹介していく。

第一回と第二回は、株式会社日建設計の加登美喜子氏。日建設計・大阪代表の指田孝太郎氏によると、社の構造部門の次世代を担う人材だそう。

構造設計の魅力伝える意図でこの連載を企画したが、構造のみならず、多岐に渡って示唆に富むお話を伺えた。

「加登さん」という人のはじまり

「加登さんは、どのような経緯で、建築、構造へ進んだのでしょうか。」

「女性で構造設計に携わっていると、強い想いをもってその道に進んだと思われるがちですが、私の場合は、単にその時に最善と思われる方へ進んだ結果、たまたま今の仕事をしているだけなのです。建築学科を選んだんとステツプアップしていきます。どうしても解決できない場合は、先輩に相談しますが、基本的には類似例の図面を見たりして進めます。手とり足とりという文化は、全くありませんね。」

「それでも、ちゃんと日建設計の社員として人材が育っていくというのは、お手本となる諸先輩方がたくさんいらっしゃるということなのでしょうね。」

「そうですね。日建設計の構造設計は、こうあるべし、というのが脈々と受け継がれている気がします。面白いことに、東京、大阪、名古屋と地域が分かれているのに、どの地域においても、ゼネコンともアトリエ事務所とも違う、日建設計らしい構造設計の理念を、いつの間にか皆持っているのです。社内での議論や会話、さらには空気を感して、不思議とひとつの日建設計の人格になつていくのではないかと思っています。」

「加登さん自身は、どのようにキャリアを積んでこられたのですか？」

「入社四年目の頃、陶器浩一さんの元で働くことになりました。陶器さんは主管だったので、基本計画をした後、担当者に任せられました。いきなり陶器さんならではの大胆な基本計画と一緒には海原に放り出されたのです。その頃から女性だからどうこう考えている暇はなくなり、意匠設計者との交渉から現場対応まで、何もかも一人でやることになりました。担当者として一人前になる、という過程をそこで覚えました。意匠設計者は陶器さんの提案力に魅か

だのも、ぼんやりと将来社会に出て働くことを考えてのことでした。

大学で構造系の研究室に入ろうと思っただけは、設計演習の際に、線を引くのは好きだったのですが、プランなどを考えるのはあまり得意でなかったことと、授業でお世話になった辻文三先生がダンディだったからです(笑)。当時研究室にいらした中島正愛先生の授業に魅力を感じたのも理由のひとつでした。

中島先生は、その後の私の人生に大きな影響をもたらした、原点とも言える恩師です。先生は、アメリカに留学された経験をお持ちで、グローバル化を意識して学生に接しておられました。例えばミーティングの際には、自分の考えを整理し、起承転結を明確に説明するように教育されました。プレゼンテーション能力にも長けておられて、その背中を見て育つたため、人前で話をしなければならぬ時など、様々な場面で活

れ、構造的にも面白い仕事で周囲にあふれていました。後に陶器さんは転職されたため、陶器さんについていた社内の意匠設計者を一部引き継ぐことになりました。その後、三十代前半は、一心不乱に働いて、建築雑誌に載るような建物の設計に携わることが出来ました。そういったチャンスが転がっているのが、日建設計の良いところで、さらに、力を尽くして、それをうまく成し遂げると評価されること、また、優れた能力や経験に富んだ人たちと一緒に仕事出来る環境にいることは、恵まれていると思います。

そのような過程を経て、私自身に決断力がついてきました。これなら大丈夫、と最終的には一人で決断しなければならぬ。そういう決断力を身につけて、主管になっていくのです。それでも、まだまだ迷うことは多くあるのですが…。

それが三十五歳頃で、主管になる直前ぐらいが一番楽しかったですね。先輩が全部任せられるので、自分で構造計画をして、打合せや概算、現場対応まで自分で決断して進める代わりに、自分が責任を持たなければならぬ、という覚悟で、ひとつひとつの物件に没頭していました。」

「加登さんにとって、仕事の上で喜びや面白味を感じる時はいつですか？」

「建物が完成したときはもちろんのこと、打合せの過程で、相手が信頼してくれていると感じられた時は嬉しいですね。設計はチームでやるものなので、信頼しあえる仲間ができて、建物が完成して、最後にみんな、大変だったけどいいものができてよかったよね、と言いあえるのがこの仕事を続けられる理由です。」

かされました。

就職活動時も、たまたま辻先生が、「加登さんは日建設計向きだから、面接を受けに行ってみたらどうか。」と勧めてください。たのが入社できかけでした。卒業論文での受賞や、辻先生や中島先生の教育が功を奏して、採用されることになりました。」

「日建設計向きだ、と言われたのは、どういうことか分かりましたか？」

「何年か経って分かりました(笑)。ここでは、主張しないと生きていけないのです。遠慮していたら、仕事にならない。私は自分の思ったことを自由に言うタイプなので、そこが合っていたのでしょう。」

「当時、日建設計に女性社員はいたのですか？」

「女性の意匠設計者はわずかにいましたが、構造設計では初めての正社員でした。先輩方はかなり戸惑ったようで、私に対して遠慮をしていた気がします。それが三年

また、現場もすごく面白かったです。社内には監理部門があり、大阪の構造設計部門では、三十代前半にジョブローテーションで現場に出るのが一般的でした。ところが、私とその年頃になると、あの構造計算書偽造問題が起こって、構造部門としてもそれほどではなくなりました。でも、どうしても現場に出たいと懇願して、三十台後半に、私が係わった建物の現場に監理者として出られることになりました。

現場に出て、いつの間にか、日建設計で学び、身につけていたマネージメント力や決断力、技術力が監理でも生かせることに気がつきました。

現場こそ男社会じゃないですか。そこに乗り込んでいく訳で、どうすれば女性でも監理者として信頼してもらえるか考えました。現場では「ぶれない私」をモットーに、自分の考えをしっかりと伝えたり、決断する場面があったり、逆に職人さんから専門的な技術を教えてもらったりして、信頼関係を築けた職人さんでもできました。設計と同じで、設計監理者、ゼネコンの管理者、職人さんがチーム一丸となって建設していく素晴らしさはなんとも言えません。

老後は、監理のおぼちゃんが終わるといふのもいいなと思いました(笑)。というのも、監理チームに七十二歳のベテランの方がいたので、監理の仕事って現場を歩き回るので、とても元気な訳ですよ。すごく健康がいい(笑)。」

「それに、現場ではいろんなことが起こるから、頭も働かせるっていう…。」

「そうなんです。歳を取ると、煙たがられることもありませんが、その人は年の功だからその期待される役割がちゃんと

くらい続きました。でも、ある時に、私は女性だから、という意識はおいといて、加登さん」として接してもらおうと思ったのです。

一方で、意識しなくても女性のメリットは結果的にありました。例えば、女子学生のために大学で講演をして欲しいとか。

また、私の係わった建物を対外的に構造の賞に応募するチャンスが今までありませんでしたが、中島先生のプレゼン教育と、女性の構造設計者が目新しいこともあって、受賞に繋がったのだと思います。」

構造設計者としての成長と役割について

「入社以降、どのように構造設計を学んだら、技術を高めたりしたのですか？」

「日建設計では、教えてもらうという文化は基本的になく、自分で考えて学べ、が原則です。最初は、先輩が構造計画をしたものを

あつて、かつ健康。老後の理想を見ましたね(笑)。趣味に生きられたらいいのですが、建築に携わると、面白くてついつい仕事人間になってしまうので、それであれば、長く建築の世界で、いろんな人から必要とされて生きているのがいいな、と思います。

構造設計って、とても緊張感があつて集中力や体力がいる仕事なのです。歳を取ると衰えていくので、私自身は、ずっと第一線で構造設計を続けるといのは難しいと思っています。社内では、構造設計から離れていく人も多く、技術力と経験を活かして構造設計者をサポートする立場になったり、監理部門などの別の部署に異動したり、転職して大学の先生になったりしています。

私も、設計図をバリバリ作っている構造設計者から、別の役割に変わっていくのでしょうね。」

「現在、加登さんは、どういった役割、段階に入っているとされますか？」

「半年前に現場監理から構造設計部門に戻ってきて、最近では主管として、基本設計段階から施主のところに打ち合わせに行くことが増えてきました。世の中では女性の構造設計者は珍しいので、施主に不安がられないかと思ひ、四年前にドクターを取りました。名刺に『博士』と書いてあったら、ちょっと信用してもらえかな、と。そして、結構、効果てきめん(笑)。」

社内での信頼関係はある程度築けたと思うのですが、社外へ出た時に、どのようにしたら相手に信頼してもらえるか、というのを考えると、肩書きも自分を売るといふ戦略の一つですよ。

それから、構造設計に関することを分かりやすく説明するとか、施主と適度に打ち

解けるなど、意匠設計者が施主と上手に接しているのをうまく吸収して、施主との信頼関係の築き方を、今勉強しています。

最初は内向き、まずは意匠設計者に対して、次は施主、最後は社会に対して信頼を得る、ということ、歳を取れば取るほど、考えていかなければならないのではうね。

それにしても建築は、何年経ってもまだまだ分からないことばかりです。どんな建物でも、必ず新しい発見があったり、難題にぶつかったりすることは楽しいです。ずっと建築に携われますね。」

それを、飽きないとか面白いと捉える姿勢が、向上に繋がっているのでしょう。分からないこととどう向き合うかが大事ですね。

総合設計事務所における協働

——日建設計の作品には、意匠、構造、設備が体となって取り組まないといけないものが多くあると思うのですが、どのようなプロジェクトを進めていくのですか？

「例えばプロポーザルやコンペだと、まず、意匠、構造、設備担当者でチームを作ります。最初のスケッチを描くのは、やはり意匠設計者ですが、建物のコンセプトなど、初期の段階から三者一緒に考えて、チームとして大きな合意をとる、という感じですね。」

——その後の具体的な設計は、どのように進めているのですか？

「意匠設計者に対して構造設計者の人数が少ないので、長い間一件だけべったり携わることがまれです。意匠設計者から音沙汰がないと、たまに雑談をしに行つて、進捗

状況を偵察しながら進めます。そろそろ見に行かないと、とんでもないことになっていくとか、よく一緒に仕事をする人であれば、その人の癖も分かるし、カンが働いてきますよ(笑)。」

——そういった、人やその動きを感じ取る力も必要なのですね。

「やはり設計は、所詮、人がするものなので、人とその関係性は重要だと思っています。設計の仕事はとても幅が広いので、多くの人が関与します。意匠、構造、設備などの接合部分に、いかにうまく入りこんでいくかで、建物の出来が大きく変わると思っています。ここは自分の範囲外、と思わないで、相手の分野に少し入つてみたり、逆にアドバイスしてもらったり、というのが、うまく仕事が流れて、いいものができるコツだと思います。」

それぞれの役割を持ち、家族のようなチームが作れた時は、面白いですね。そのような仲間が、階は違うけれど社内について、すぐ話に行けるというのは、総合設計事務所の魅力だと思います。」

——設計に携わる人に、こうあってほしい、ということはありませんか？

「後輩の設計者には、スケッチを手で描いて仕事を覚えてほしい、と思つています。先輩方は、手で描くことにより、体でディテールを覚えて積み重ねてきたベースがあるから、日建設計として品質を確保しつつ、様々な良い提案ができるのだと思うのです。」

——でも、その二十代の人たちって、次の日建設計を担っていく人たちですよな。

「そうなのです。少し先輩になった私たちが、今度は後輩を育てていく役割を担うこ

とも必要でしょうね。

後輩の構造設計者に対しては、普段から三つのことを意識してほしいと思つています。

一つ目は、構造設計者として必要なことを主張するために、意匠設計者とのように上手にコミュニケーションをとるか、ということ。

二つ目は、自分から設備設計者の元に打合せに行くこと。設備計画とのすり合わせが重要なのですが、なかなかできない。待っているのではなく、自分から積極的に行動して欲しいと思います。

三つ目は、解析の結果に振り回されずに、落ち着いて、電卓をたたいて、大きくざっくり確認すること。これは、私自身にも未だに言い聞かせています。

その三つがうまく伝わり、後輩が積極的に仕事をしているのを見ると、とてもうれしいです。」

——意匠と構造と設備、相互の理解が重要ですね。

「社内の意匠設計者でも、経験のある人が多くいます。私は、その先輩方の元で仕事を覚えたので有難かつたと思つています。今は、少し事情が違つて感じています。構造の知識、例えば、構造部材以外の仕上げ材など全てのものに、自重や地震時の慣性力が生じる、ということを意識しておく必要があります。でも、そういう意識が、最近の意匠設計者には薄い気がします。

構造設計をしていると、様々な分野で活躍できることがあるように思つています。今まで意匠設計者が引つ張つてきたことを、構造設計者がすること、構造設計者の地位を高めたと思います。」

日建設計は大規模事務所なので、年齢によって役回りというものがあつて、その歳ごとに立ち位置が変わつていけばいいと思つています。ある年代までは、ひとつの仕事にじっくりと取り組み、自分が一人前になることに集中し、次のステップとして、施主や社会に対して、また、構造設計からもう一歩踏み出したところで、必要な役割を担つていくのかな、と。特に若いときは、かっこいいものが作りたいというモチベーションも必要です。施主のお金で挑戦させてもらい、勉強させてもらつて、後で振り返つてちゃんと反省する、とか(笑)。

そのような意味では、建築、特に構造設計の仕事は、自分の作った図面で、何億、何十億というお金を使い、現場では、その躯体のために、何百人、何千人という職人さんが、動いてくれている…。

だから、図面がものを決める、本当に大事なものだなど実感します。やはり設計事務所働くとは、設計図を作つてお給料をもらう。図面を売っているのだから、そこは一番大切にしたいと思つています。

また、そうして積み重ねてきた先輩方の実績と信頼で、仕事をいただける、ということなので、やはり日建設計という看板に泥を塗つてはいけない、と思つています。」

今回は、仕事の取り組み方や展望、日建設計ということなど、人物像に焦点を当てた。今回は、建築や構造に対する考えなどを中心に、さらに深くお話を伺う。

聞き手／奥河歩美
(経歴 二三頁参照)



撮影：岡本公二

京都大学医学部百周年記念施設

芝蘭会館

2006年 日本構造技術者協会 新人賞 受賞作



撮影：岡本公二

第32回大阪都市景観建築賞(愛称 大阪まちなみ賞)入賞作品

◆表彰目的 周辺環境の向上に資し、かつ、景観上優れた建物や建物を中心とするまちなみを表彰することにより、個性と風格のある都市景観の形成に寄与するとともに、都市景観に対する意識の高揚を図ることを目的とする。

◆対象 大阪府域内の建物(平成19年10月1日から平成23年7月31日までに完成したもの)及び建物を中心としたまちなみ(平成23年7月31日までに完成したもの)で、一般の方々から推薦を受けたもの。

◆審査委員 ※50音順 審査委員長*

指田孝太郎(建築)
(株)大阪府建築士会相談役

中嶋 節子(建築)
京都大学大学院人間・環境学研究所准教授

藤本 英子(芸術)
京都市立芸術大学美術学部デザイン科教授

下村 泰彦(造園)
大阪府立大学大学院生命環境科学研究科教授

夏原 晃子(デザイン)
美術造形デザイナー

藪崎 剛志(建築)
(株)大阪府建築士事務所協合理事

近井 務(建築)
(株)日本建設業連合会委員

久 隆浩*(都市計画)
近畿大学総合社会学部環境系専攻教授

山岸 徹也(報道)
読売新聞大阪本社社会部長

大阪府知事賞 塩野義製薬 医薬研究センター SPRC4



建築位置：豊中市二葉町 3-1-1
 完成年月：2011年7月
 主用途：研究所
 建築主：塩野義製薬(株)
 設計者：(株)竹中工務店
 施工者：(株)竹中工務店
 撮影者：平井広行

〈講評〉
 壁面の凹凸の変化、ランダムな開口部、さらにそれらをアルミルーバーのダブルスキンで覆うことで長大な壁面に統一感と変化をつくりだしている。ルーバーは太陽光の当たり具合によって陰影をつくりだすと同時に、色彩の印象変化をもたらしている。また、阪神高速道路ぞいに建つという立地条件では、視点の移動によっても変化をもたらしてくれる。単調になりがちな工業地域のまちなみのシンボルとなるいいデザインの建物といえる。(審査委員長 久 隆浩)

大阪市長賞 大阪ステーションシティ



建築位置：大阪市北区梅田 3-1
 完成年月：2011年3月
 主用途：駅 商業施設 ホテル 事務所
 建築主：西日本旅客鉄道(株) 大阪ターミナルビル(株)
 設計者：西日本旅客鉄道(株) ジェイアール西日本コンサルタンツ(株) 安井・ジェイアール西日本コンサルタンツ設計共同体
 施工者：大阪駅改良他工事特定建設工事共同企業体 (大林組・大鉄工業・竹中工務店・銭高組・浅沼組・奥村組) 大阪駅新北ビル(仮称)新築工事特定建設工事共同企業体 (大林組・大鉄工業・竹中工務店・銭高組・浅沼組) アクティ大阪増築工事特定建設工事共同企業体(竹中工務店・大鉄工業) 西日本電気システム(株)

〈講評〉
 大阪駅と南北ゲートビルディングで構成される本施設は、関西・大阪の玄関口に相応しい快適で賑わいのある景観を呈している。特に、施設周辺からの景観では、高層棟やコンコース上空のドームがランドマークとなっている。また、公的空間に近い施設内広場からの景観では、線路縦断方向の直線的な「抜け」がターミナル固有の景観を創出するだけでなく、広場周辺建造物も低彩度・高明度で構成され、洗練された都市的景観を呈している。(審査委員 下村泰彦)

審査員特別賞 南海ビル・高島屋大阪店



建築位置：大阪市中央区難波 5-1-60
 完成年月：2009年12月
 主用途：事務所 商業施設 ホテル
 建築主：南海電気鉄道(株) (株)高島屋
 設計者：(株)プランテック総合計画事務所 (株)竹中工務店 (株)大林組
 施工者：(株)竹中工務店 (株)大林組 (株)銭高組 南海辰村建設(株) 南海ビルサービス(株)
 撮影者：小林浩志

〈講評〉
 御堂筋の正面に位置する南海ビルは、これまでもその歴史的建造物としての存在は大きかったが、今回の再生で難波の顔として正面性を活かし、地域の質を格段に上げている。ライトアップや新本館ファサードの演出は夜間景観への取組みとして評価出来る。また商業建築の外観で問題になる屋外広告物を、ガラススクリーン内に限定して掲出する手法は、先進的事例として評価された。(審査委員 藤本英子)

主催 大阪府・大阪市・(公社)大阪府建築士会・(一社)大阪府建築士事務所協会・(公社)日本建築家協会近畿支部・(一社)日本建築協会

◆審査総評

本年の審査対象78件(建物69件、まちなみ9件)から、例年通り審査資料にもとづいた1次審査で10件を選出し、現地審査による2次審査を行った。受賞作品は、昨年度にひきつづき、研究施設、商業施設、公共施設、医療施設、オフィスビルとバラエティゆたかなものとなっている。大阪府知事賞の塩野義製薬医薬研究センターSPRC4は、単調になりがちな長大壁面をアルミルーバーのダブルスキンで覆うことで統一感と変化をもたらしている。大阪市長賞の大阪ステーションシティは、大阪駅とノースゲートビルディング、サウスゲートビルディングを大屋根でつなぎダイナミックな景観を生み出している。審査員特別賞の南海ビル・高島屋大阪店は、昭和7年に完成した南海ビルのオリジナル・ファサード・デザインを復元するとともに、それに調和すべく高島屋大阪店の新築デザインを施している。緑化賞の摂津市立コミュニティプラザ・摂津市立保健センター・J.S.B.摂津エコセンタービルは、阪急摂津市駅から3階へ直接アプローチできる大胆な屋上緑化の工夫を行っている。また、奨励賞の医療法人篤友会坂本病院は、棚田を屋上につくるなど慢性期から終末期である入院患者になつかしきを感じさせるデザインの配慮がなされている。本町南ガーデンシティは、重厚な低層部と軽快な高層部デザインを組み合わせ高層ビルの威圧感を軽減するとともに、低層部にはゆとりを感じさせるオープンスペースのデザインが施されている。あべのキューズタウンは、立体的なテラスやパティオなどを設けることで300mにわたる長大な壁面を分節化している。このように受賞作品は、いずれも個性的で創意工夫がなされたデザインが施されており、地域のシンボル景観となっている好事例といえる。なお、今年度の受賞作品はいずれも大規模な建築物となっているが、昨年度のように個人住宅など小規模な建築物も受賞されるよう期待している。おそらくまちなみに貢献するいいデザインの小規模建築物も存在するのだろうが、大規模建築物と違って目にとまる度合いが低く、推薦されにくいことも原因と考えられる。こうした建築物が積極的に応募されるよう賞のさらなる周知も必要かもしれない。



審査委員長 久 隆浩

緑化賞 摂津市立コミュニティプラザ・摂津市立保健センター・J.S.B.摂津エコセンタービル



建築位置：摂津市南千里丘 5-35、5-30、5-25
 完成年月：2011年5月
 主用途：事務所 集会場 コミュニティプラザ・保健センター
 建築主：(株)ジェイ・エス・ビー
 設計者：(株)都市建一級建築士事務所
 施工者：(株)浅沼組
 撮影者：酒井文明

〈講評〉
 駅前のロータリーに面し低層で開放的な屋上庭園からのスロープが来訪者を迎え入れる。保健センター、銀行、シニアマンション等が隣接して利用者に便利で快適なコミュニティを提供している。横を流れる改修された爽やかな小川まで取り込んだなごやかな景観は、この周りの環境との連携を含めて、今後も多くの市民に愛され集う楽しさと有用な役目も果たすと期待している。(審査委員 夏原晃子)

奨励賞 医療法人 篤友会 坂本病院



建築位置：豊中市豊南町東 1-6-1
 完成年月：2011年1月
 主用途：医療施設
 建築主：医療法人 篤友会
 設計者：(株)竹中工務店
 施工者：(株)竹中工務店
 撮影者：古川泰造

〈講評〉
 青味のあるグレーのタイルが貼られた外壁はバルコニーを介して病室の窓に陰影を与え、端正な外観を創出している。屋上にはリハビリ室と繋がった庭園があり自然を感じさせる緑、水が配されている。病室計画も行き届いており、入院患者の希求に配慮がなされた療養型病院である。(審査委員 藪崎剛志)

奨励賞 本町南ガーデンシティ



建築位置：大阪市中央区北久宝寺町 3-6-1
 完成年月：2011年3月
 主用途：事務所
 建築主：積水ハウス(株)
 設計者：(株)日建設計
 施工者：鴻池・大林共同企業体
 撮影者：古田雅文

〈講評〉
 御堂筋沿いの建築は景観形成への視点が設計思想に与える影響が大きい。屹立する柱列が構成するポルティコが御堂筋を延伸する中間領域を形成し、銀杏並木側への解放性が透明性の高い開口を介して内部へと貫入し、陰影の付与された外装と相俟って平断面双方の方向への深みと重層性を醸し出している。(審査委員 近井 務)

奨励賞 あべのキューズタウン



建築位置：大阪市阿倍野区阿倍野 1-6-1
 完成年月：2011年3月
 主用途：商業施設
 建築主：東急不動産(株)
 設計者：安井建築設計事務所・東急設計コンサルタンツ共同企業体
 施工者：竹中工務店・東急建設共同企業体
 撮影者：高野尚人

〈講評〉
 新たな核店舗を建物内部に取り込み、通り側に路面店を配置。威圧的になりがちな巨大な壁面を分節化してスケールダウンし、ゆとりのあるオープンスペースを設けて、まちの景観に馴染ませている。ひな壇状に積層したフロアと、内部と外部を繋ぐモールによる変化のある空間が人々を引き込み、従前の「あべの銀座」の賑わいの立体的な再構築を試みている。(審査委員 指田孝太郎)

『公益社団法人』移行のご報告

平成 25 年度定時総会 5 月 29 日(水) 開催

平成 25 年度定時総会は、公益社団法人移行後初めての総会となります。
総正会員の 1/3 以上の出席がなければ、総会は成立しません。
委任状による出席も可能ですので、当日ご都合のつかない方は、同封の委任状の提出を何卒お願い申し上げます。

本会では、新公益法人制度による公益社団法人を目指すことが、平成 22 年 5 月 25 日の通常総会において承認され、以後、移行に必要な事項の審査を経て、平成 25 年 3 月 19 日に大阪府知事より公益社団法人移行認定書の交付を受けました。

これに基づき、平成 25 年 4 月 1 日に新法人の設立登記を行い、「社団法人」から「公益社団法人」に移行しました。

『公益社団法人移行に当たって』



公益社団法人 大阪府建築士会
会長 岡本 森廣

本会創立 60 年を迎えた節目の年に公益社団法人に移行できることを、会員の皆様とともに喜びたいと思います。これは、60 年間に亘る本会会員の様々な活動が、建築文化の向上や地域社会の健全な発展に寄与する等、本会の活動が社会にとって「公益性が高いと評価された証」です。建築業界をはじめ一般社会から高い信頼を獲得できるものと確信します。

新定款では、「建築士の品位の保持及び業務の進歩改善を通して、建築物の災害等から府民の生命及び財産の保護等を図り社会に貢献する」こととしており、私たちには公共性の高い活動が求められます。

本会では、建築士自身の日常業務に必要な技術力の向上を図る CPD 研修をはじめとして、一般消費者を対象とした建築相談、近い将来発生するとされる南海トラフ地震に備える応急危険度判定士連絡網の整備や耐震診断の普及啓発活動、行政が設置する審議会や ADR 等への会員の派遣・推薦など様々な公益目的事業を実施しております。

今後とも、潤いのある豊かな生活環境の創造と、個性的で活力のある地域社会の実現を図るため、積極的に取組んで参る所存ですので、本会会員の皆様には、ご理解とご協力を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

1. 公益社団法人として活動していくための要点

公益社団法人とは、平成 20 年 12 月 1 日施行の「公益社団法人及び公益財団法人の認定等に関する法律」に基づき、行政庁の「公益認定等審査会」が公益社団法人として相応しいかどうかの判断を行い、この認定結果に基づき設立される法人です。

本会の公益社団法人への移行により、行政庁・建築士・府民等からこれまで以上の社会的信用が得られ、本会の公共性の高い活動をより強く押し出せるものと考えます。

本会が公益社団法人として活動する際、遵守が必要な要点は、以下の通りです。

【公益目的事業比率 50%以上】

本会は、「不特定かつ多数の者の利益の増進に寄与する公益目的事業費の比率が、費用で計って 50%以上（申請は約 70%）の公益認定法の基準を満たしている団体である」と大阪府より認定を受けました。このことは、**本会活動が高い公益性を有することが公認されたことを示します。**

【ガバナンスの強化】

公益社団法人は、法人自らが責任を持った自主的・自律的な運営が求められます。理事等の役員は、自身の役割や責任を果たすことなどを法人の内部統治（ガバナンス）に関する様々な事項が法律で定められており、これらに対応するため、平成 24 年度通常総会承認の定款変更等に基づき、本会の運営を見直します。

【総会は最高議決機関】

総会は最高議決機関であり、決算・予算、理事の選任等の基本事項の決議を行う場合は、**総正会員の議決権の 1/3 以上（従来は 1/20 以上）を有する正会員の出席（委任可）で成立し、出席した正会員の半数以上の賛成が必要**です。また、定款変更等重要な議決に当たっては、**総正会員の半数以上で、総正会員の議決権の 2/3 以上の賛成が必要**です。

2. 公益目的事業の概要

本会の公益目的事業は、「一般消費者の利益の擁護又は増進」「地域社会の健全な発展」「文化及び芸術の振興」などを目的として、下記の 3 区分で運営します。

区分	事業の内容
公1	まちづくり活動や地域景観形成活動、建築物の地震対策、建築に関する情報発信や建築相談を実施することにより、地域社会への貢献を図る事業 (1)地域貢献活動事業への助成 (2)景観整備機構としての事業活動(大阪市、箕面市、吹田市の指定) (3)木造住宅の耐震診断・啓発事業 (4)被災建築物応急危険度判定士の派遣 (5)自治体への建築指導行政支援 (6)行政審議会等への委員派遣・推薦 (7)建築に関する相談事業 (8)建築に関する情報発信事業(建築情報誌の発行、建築情報サイトの運営)
公2	優れた建築物やまちなみを表彰し広く公表することにより、建築文化の向上並びに地域社会の健全な発展を図る事業 (1)大阪都市景観建築賞(愛称:大阪まちなみ賞)の運営 (2)大阪府公共建築設計コンクール(愛称:あすなろ夢建築)の運営 (3)大阪建築コンクールの運営
公3	建築士を目指す者の養成、建築士試験及び合格者の名簿登録・閲覧、専攻建築士認定、研修会の開催等の建築士の資格とその資質向上に関する一連の育成業務を本会が一元的に実施することにより、府民の利益の擁護及び増進を図る事業 (1)建築士を目指す者の養成の事業(一級・二級建築士設計製図講習会・模擬試験の実施) (2)建築士試験及び合格者の名簿登録・閲覧の事業 (3)専攻建築士の認定・名簿の公開 (4)継続能力開発(建築士会CPD)制度の運営 (5)定期講習の実施 (6)建築士法第22条の4第5項の規定に基づく建築士に対する技術研修の実施 (7)耐震診断・改修指針講習会の実施 (8)被災建築物の応急危険度判定講習会の実施支援

その他の事業

区分	事業の内容
共益事業	友好建築団体等との相互の理解と親善を図る事業及び本会会員の福利増進に関する事業 (1)建築士全国大会 (2)近畿建築士協議会 (3)在阪友好建築団体との交流・情報交換 (4)本会会員の福利増進に関する催事 (5)本会会員の名簿の作成・配布、会員証の発行、管理業務
収益事業	建築関連書籍及び建築関連保険の販売事業

3. 会員の公益目的事業への参加

【委員会への参加】

本会の 6 つの委員会（運営・事業・研修・社会貢献・表彰・情報）において左表の公 1～公 3 の公益目的事業を実施しています。会員は委員会に加わり事業の企画や実施を担当する委員として活動していただくことができます。

また、府内を 8 地域に区分して地域活動を行う分科会を設けており、それぞれの地域に居住又は勤務する会員が連携して、地域文化や景観等の保存・向上等を目的とした活動を実施しています。

【震災時の応急危険度判定】

大地震の発生時に二次災害を防止するため、被災建築物応急危険度判定制度と被災宅地危険度判定制度が設けられています。これらの実施について、大阪府からの危険度判定士派遣要請に基づき、**本会が会員判定士の参集の可否を取りまとめ、参集可能な判定士に派遣先等を指示**することとしています。

建築士は、講習会の受講により判定士の資格を取得できます。未取得の会員の方は、**ぜひ資格を取得し、有事の際の判定活動にご参画ください。**

【既存木造住宅の耐震診断啓発活動】

本会の耐震部会に所属する耐震診断員は、市町村と連携して既存木造住宅の耐震診断啓発活動を行い、希望住戸の診断業務を実施しております。本会は、**市町村等からの診断員派遣要請に基づき、診断員を派遣**します。

4. 公益社団法人の優遇措置

公益社団法人に対して次の優遇措置があります。

【寄付税制優遇措置】

(国税)

公益社団法人は、寄付優遇の対象となる「特定公益増進法人」に該当する。

- 個人寄付額から 5,000 円を差し引いた金額をその個人の所得から控除できる。
- 法人からの寄付額を損金算入できる。

(地方税)

条例により指定した寄付金が寄付優遇措置の対象寄付金となり、個人住民税の額から控除できる。

【法人税課税免除】

公益目的事業は非課税となり、収益事業についてのみの課税となる。

自らの公益目的事業に支出した金額は、損金算入できる。

社会に必要とされる建築士となるために

建築士会CPDとは

CPDとは「Continuing Professional Development」の略称です。「継続的能力・職能開発」「継続職能研修」などと訳されています。

建築士は、建築士資格によって業務独占が付託されており、法的に義務づけられた講習以外にも、社会情勢の変化、建築技術や工法の進歩、発注者のニーズに対応すべく、自ら率先して職能をのびして行かなければなりません。

CPDはそのニーズに応えるために確立された制度です。

建築士会CPDの歴史

建築士会CPD制度は、大阪府建築士会が全国に先駆けて、平成十三年十一月に開始しました。

平成二十一年一月五日に施行された改正建築士法により、すべての建築士に対する研修をおこなうことが建築士会に義務づけられました。これを受けて、建築士会CPD制度をオーブン化し、建築施工管理技士などのすべての建築技術者が「建築士会CPD」に登録することが可能になりました。

建築士会CPDの現在

○建築士会CPDの登録者総数の一三%
それに伴い、以前実施していた年一回の履歴証明書の郵送は廃止されました。各自がより主体的に、迅速に証明書を活用するため、士会ホームページから参加された研修日以後、随時登録内容の確認が可能となり、活用先の要望に応じて「CPD実績証明書」を容易に発行できる仕組みになっています。

仕組み

「建築士会CPD制度」は、建築士の知識、技術に関する自己研鑽と倫理観の醸成を目的としています。「建築士会CPD単位」が付与された研修を受講し単位を取得することで、会員、非会員を問わず、日頃から「まじめに努力する建築士」が「CPD建築士」として、社会的認知度を高めることができます。大阪府建築士会では、CPD関連事業内容をホームページで掲載中です。今後はメール登録されたCPD登録者に対して、CPD研修や事業の開催案内（概要）を個別にいち早く送信できるように取り組んでいきます。

が士会会員外です。

現在、大阪府建築士会では総会員数約三千四百名の内、千四百名が、また会員外でも百八十人が建築士会CPD制度に登録しています。

○大阪府公募型設計プロポーザル方式の評価対象となりました。

国や地方行政機関における設計や工事発注の入札等の評価対象として「建築士会CPD制度」の受講実績の活用が進んでいます。（平成二十五年一月時点で、国土交通省など、全国四〇県、三十一市、四町）

大阪府においては、今年度、平成二十五年から、公募型設計プロポーザル方式に「建築士会CPD単位」が評価対象となることが決まっています。

○大阪府建築士会賛助会員の企業に勤務されている方も、大阪府建築士会の正会員と同じようにCPD制度を利用することができます。

○建築士会CPDプロバイダー制度

講習会等の主催者（プロバイダー）が、自ら行う講習会等を建築士会CPD認定プログラムとして活用することができます。具体的には、賛助会員の企業内部で

独自におこなう講習会を建築士会CPD認定プログラムとすることが可能です。

○APECAーキテクトを目指す国際派にも有利です。

ご存知の通り、APECAーキテクトとは、実務経験などについて一定レベル以上にあると認められるアーキテクトに対する、APECA (Asia Pacific Economic Cooperation アジア太平洋経済協力) 域内の共通の称号です。

このAPECAーキテクトの要件のひとつとして「継続的な専門能力開発を満足すべきレベルで実施していること」とされており、その実績証明方法として建築士会CPD制度が活用できます。

建築士会CPDの展望

「二十一世紀は個の時代」と言われ、「個人が、何ができ、何をしてきたか」が問われるようになります。「建築士会CPD制度」は、その裏づけを客観的に建築士会がおこなう制度といえます。

しかし、CPD単位をただ貯めているだけでは意味がありません。自己責任において、積極的に活用して始めて有効に機能する制度です。自らが大阪府建築士会ホームページにおいて、取得単位数を確認し、(財)建築技術教育普及センター

制度推進分科会

の「建築CPD情報提供制度」等と共有されている認定プログラムの中から、不足している知識を学び、プレゼンの際の自己PRなどのツールとして積極的に活用してください。

今日、建築専門技術者の業務は多岐にわたり、受注、競争も激化しています。新しい知識や技能の修得、技術者としての生涯教育は、益々必要になってきています。大阪府建築士会が提供する建築士会CPDは、多様なニーズに応えるために「継続的であること」「専門技術者やその組織の業務に役立つこと」「専門性」はもとより「より幅広い基礎的素養」を磨き「体系的」に学習できるプログラム構築を目指していきます。

大阪府建築士会では、今後「建築士会CPD実績」が大阪府内の公共建設工事発注時の評価対象に認められる等、「建築士会CPD実績」を活用した公共発注案件の拡大に取り組んでいきます。

建築士CPDカードの活用

CPD登録者の利便性を高めるため「建築士CPDカード」(ICカード)による新システムを採用し、CPDの実績登録の敏速化を図っています。(大阪府建築士会では平成二十三年に全正会員に配布済)

建築士会CPDはじめての一步Q&A

Q 建築士会CPDに参加するには？
建築士会会員の場合は所属する建築士会、会員以外の場合は勤務先所在地または住所地の建築士会に、士会が定める会費を添えて申し込み登録してください。

Q 登録などにかかる費用は？

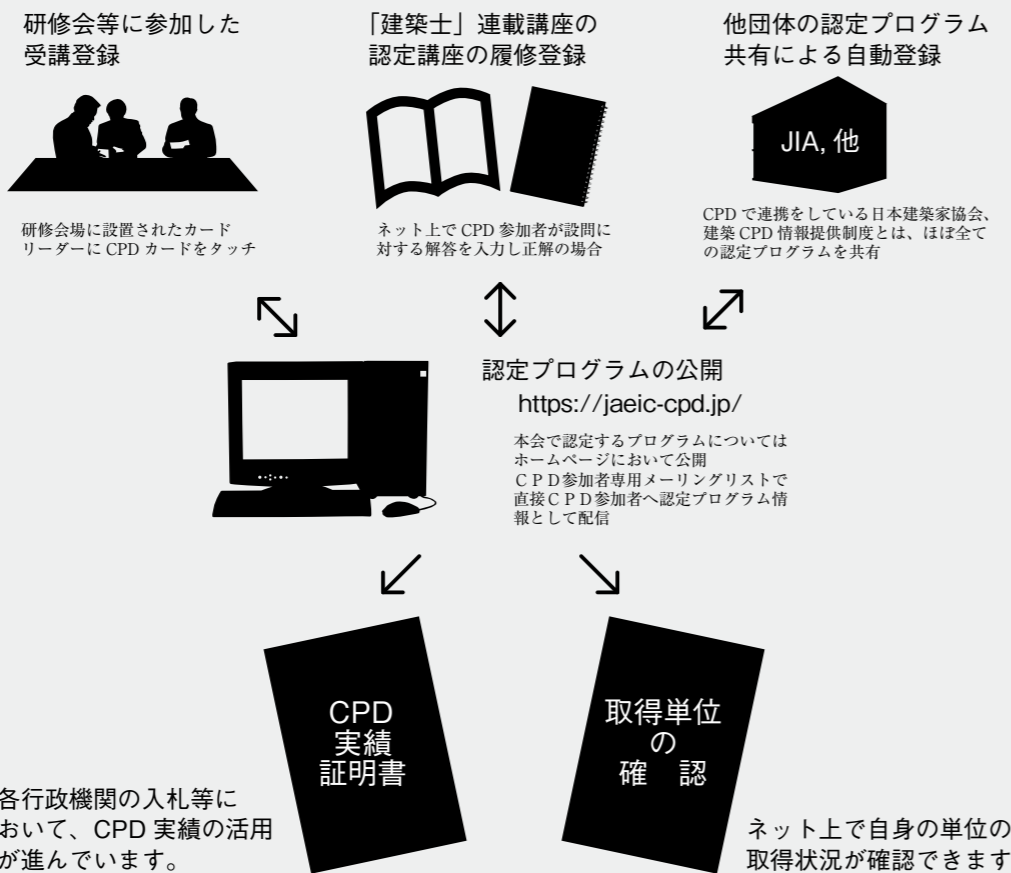
会員と会員外で費用が異なります。会員の場合は、データ登録・管理費二千元/年。会員以外の場合は、初期登録費三千元、データ登録・管理費六千元/年、CPDカード発行手数料三千元。なお、(財)建築技術教育普及センターが運営する建築CPD情報提供制度の利用を希望する場合は、右記に加え五百円が必要になります。

Q 単位取得の目安と有効期限は？

建築士会連合会では、十二単位/年。入札などに活用する場合は、各特定行政庁等にお問い合わせてください。また、CPD単位に有効期限はありません。

登録資格・手続き・費用などの詳細は
<http://www.kenchikushikaito.jp/cpd/>
をご覧ください。

建築士会CPDシステムの概要



建築士 CPD カード
平成23年に全正会員に送付しています

本記事に対するご意見・ご要望をお寄せください。また、編集部では積極的な士会活動報告と、編集部と一しよに記事を作成していただけるスタッフを募集しています。ご連絡は下記まで
info@aba-osakafu.or.jp

記事構成
建築人編集部
曾我部 千鶴美
筑波 幸一郎 (責任編集人)

INFORMATION

Sponsorship

建築士会からのお知らせ

平成25年度 建築士定期講習

5/20、6/12、7/23 CPD6単位

建築士事務所に所属の一級・二級・木造建築士で、平成22年度に建築士定期講習を受講された方、及び平成22年度以前に建築士試験に合格後、建築士定期講習を受講の方は、平成25年度中に必ず受講してください。

■日時・会場

5/20(月) 大阪YMCA国際文化センター
定員300名、会場コード5C-51
6/12(水) 大阪YMCA国際文化センター
定員300名、会場コード5C-01
7/23(火) 大阪国際会議場
定員600名、会場コード5C-02

いずれも9:30～17:30(受付9:00～)

詳細 <http://www.aba-osakafu.or.jp/>

■申込締切日・受講料

5/20(月)開催分:4/30(火)申込書必着
6/12(水)開催分:5/31(金)申込書必着
7/23(火)開催分:6/30(日)申込書必着
※大阪での申込受付は郵送のみです。
必ず簡易書留郵便にてご送付ください。
※受講票返送のため返信用封筒(長3)に住所・氏名をご記入のうえ、80円切手を貼って同封してください。
※定員に達し次第、受付を終了します。
※受講料12,900円(消費税含)

■申込書配布・受付場所

大阪府建築士会事務局
大阪府建築士事務所協会事務局
※申込締切日まで平日9:30～17:00に無料配布。
※定員に達し次第、配布を終了します。
※申込書は下記の(財)建築技術教育普及センターのホームページからダウンロードも可能です。
http://www.jaedic.or.jp/k_teiki.htm

平成25年 二級建築士・木造建築士試験案内

■インターネットによる受験申込

受付期間 3月28日(木)10:00～
4月3日(水)16:00まで。

HP <http://www.jaedic.jp/>

■郵送による受験申込

受付期間 3月19日(火)～4月3日(水)
郵送先 建築技術教育普及センター本部
※過去の受験票又は合否の通知書を貼付できる者に限る

■受付場所における受験申込

配布期間 3月11日(月)～4月15日(月)
(土・日曜日、祝日は除く。4/13(土)、4/14(日)は受験申込書の受付を行う所定の受付会場に限って配布を行う)
配布時間 9:30～17:00
(4/15(月)は9:30～16:00)

配布場所 ・大阪府建築士会
大阪市中央区谷町3-1-17
高田屋大手前ビル5F
受付期間 4月11日(木)～4月15日(月)
(土、日を含む)
受付時間 10:00～17:00
受付場所 大阪府建築士会
二級建築士学科試験日 7月7日(日)
木造建築士学科試験日 7月28日(日)
二級建築士設計製図試験日 9月15日(日)
木造建築士設計製図試験日 10月13日(日)

二級建築士/設計製図 受験対策講習会

実力養成コース 7/14～9/8
直前対策コース 8/25～9/8
模擬テストI・II 9/1、9/8

■実力養成コース

(全10回、模擬テスト2回含む)
日程 7月14日(日)、7月15日(祝)、
7月21日(日)、7月28日(日)、
8月4日(日)、8月11日(日)、
8月18日(日)、8月25日(日)、
9月1日(日)、9月8日(日)
時間 9:30～16:30
会場 大阪府建築健保会館
定員 50名(申込先着順)
受講料 建築士会会員(準会員)110,000円、
一般125,000円

■直前対策コース

(全3回、模擬テスト2回含む)
日程 8月25日(日)、9月1日(日)、9月8日(日)
時間 9:30～16:30
会場 大阪府建築健保会館
定員 25名(申込先着順)
受講料 建築士会会員(準会員)35,000円、
一般40,000円
■模擬テストI・II
日程 I:9月1日(日)、II:9月8日(日)
時間 9:30～16:30
会場 大阪府建築健保会館
定員 【各回】25名(申込先着順)
受講料 【各回】建築士会会員(準会員)13,000円、
一般15,000円

※申込・詳細

<http://www.aba-osakafu.or.jp/examination/index2.html>

建築士のためのお茶会勉強会

4/17・4/23

建築士の礼儀作法のひとつとして、お茶の作法を学ぶため毎月開催している勉強会です。

日時 4月17日(水)、4月23日(火)

18:30～20:30頃まで
(原則毎月第3水曜日及び第4火曜日)
費用 年会費6,000円+1回2,500円
(年会費はキャンセル時の水屋料などのため。但し途中入会の場合の年会費は年度末までの月数×500円となります。)

先生 藤井宗熙(そうき)先生

CORE2013

～committee of annual report 2013～
4/13 CPD3単位

青年分科会・女性分科会・国際交流分科会・住宅を設計する仲間達を中心に2012年一年間の建築士会活動の合同発表会を開催いたします。建築士会の会員メリット、分科会参加による活動展開の可能性があると感じただけです。1人で出来ないことも集うことで、大きなイベントや楽しいことがたくさん出来ます。まだ士会活動をしていない知人・友人の方に是非お声をかけてください。新しい仲間づくり・ネットワークづくりを楽しみましょう。

日時 4月13日(土) 13:00～16:00
講師 高原浩之
(株)HTAデザイン事務所代表取締役
日時 5月18日(土) 14:00～18:00
(受付13:30～)

シニアサロン第48回例会

日本銀行大阪支店見学会
4/26 CPD2単位

今回は、淀屋橋にある日本銀行大阪支店の見学ののち淀屋橋界隈の旧跡を散策する企画です。日本銀行大阪支店は、明示36年に辰野金吾の設計により完成し、昭和57年に改修された旧館が現在残っております。今回は約70分の内部見学ツアーに参加いたします。見学後の懇親会も予定しています。
日時 4月26日(金) 13:20～16:30
集合 13:00
集合場所 大阪市役所南側入口前付近
定員 40名(申込先着順)
申込期限 4月5日(金)
(定員に達し次第締め切ります。)
参加費 500円
懇親会参加費 別途4,500円
※申込者には、後日参加証を送付

国際文化サロン
「南イタリア・地中海文化と世界遺産都市を巡る」
4/27 CPD4単位(予定)

多くの世界遺産が残る南イタリアの特徴的な都市を紹介し、ワインの試飲も致します。五感で味わうイタリアをお楽しみ下さい。
日時 4月27日(土) 受付:13:30～
14:00開会
場所 キッチンハウス大阪ショールーム
地下鉄四ツ橋駅下車すぐ

講師 河野 学(本会青年委員・国際委員)
スライドショー 神保 勲(本会理事・国際委員)
ワイン試飲 ビー・ロードジャパン
後援(予定) 在大阪イタリア領事館・
イタリア文化会館
参加費 1,500円(資料代含む)
定員 50名

「アメリカの建築とまちを訪ねて」
～環境デザインの視点から～
5/18 CPD4単位(予定)

今回のセミナーでは、50歳を前にして、高原浩之氏がアメリカ留学を決意した動機、その2年間で体験したこと、そして今後も引き続き建築士として「人とまちが元気になる活動」にかかわり続けたいという思いを交えながらのお話を頂きます。そして、高原氏の目から見たアメリカの今をご紹介します。益々グローバル化が進む社会において、年齢や性別にかかわらず、グローバルな社会を体験することの楽しさ、刺激を皆様にお伝えします。

講師 高原浩之
(株)HTAデザイン事務所代表取締役
日時 5月18日(土) 14:00～18:00
(受付13:30～)

会場 キッチンハウス
(地下鉄四ツ橋駅徒歩5分)
会費 1,500円 学生 500円
定員 60名

吉野石膏神戸研修センター見学会

5/23 CPD2単位(予定)

吉野石膏の製品に関する身近な技術情報の集約拠点である「吉野石膏 神戸研修センター」を見学します。「音響体験施設」は、実際にお客様の耳で石膏ボードの壁の遮音性能を体験していただける関西唯一の施設です。環境配慮への提案、耐火・遮音壁の工法展示、施工事例など見てわかる展示を解説付きでご覧いただけます。
日時 5月23日(木)14:30～16:30
会場 吉野石膏神戸研修センター
神戸市中央区港島南町1-6-34
参加費 会員500円 会員外1,000円
定員 100名

お詫びと訂正

3月号9頁掲載の第6回建築人賞応募資格につきまして、「設計者が近畿2府4県の建築士会正会員か大阪府建築士事務所協会正会員であること」とありますが、第6回建築人賞は、応募資格を限定しておりません。ここに誤記をお詫び申し上げますとともに訂正いたします。

本会の催し参加申込方法

FAX・メール・郵送で、催し名、参加者名、会員 No、勤務先、参加証送付先住所、同電話 &FAX 番号(自宅又は勤務先)を明記の上、事務局までお送り下さい。

問合せ・申込

大阪府建築士会事務局
〒540-0012 大阪市中央区谷町3-1-17
TEL.06-6947-1961 FAX.06-6943-7103
メール info@aba-osakafu.or.jp
HP <http://www.aba-osakafu.or.jp/>

蔵書管理・有効活用のお知らせ

本会事務局スペースのレイアウト変更に伴い、建築情報委員会図書ワーキンググループにて

おこなってきた蔵書整理のうち、雑誌関係については、以下の通り作業をおこなったことを

報告いたします。

1. 大学への寄贈 精査選定の結果、大阪工業大学および立命館大学へ寄贈致しました。
2. 最新2年分の雑誌に関しては士会にて保有、誰でも閲覧することができます。
3. 情報の古い雑誌については処分致しました。

大学へ寄贈した図書については、大阪府建築士会のホームページでその一覧を確認すること

ができます。下記にアクセスしてください。

<http://www.aba-osakafu.or.jp/>

会員各位におかれましては、ご理解のほど宜しくお願い致します。

建築情報委員会図書 WG

大阪府建築士会活動報告
表彰により建築の民度の向上を図る

原田 彰(建築表彰委員会委員長)

建築表彰委員会は、公益社団法人の移行に伴い、更に公益目的事業の大きな柱として運営されることになりました。目的は、「優れた建築物やまちなみを表彰し、広く公表することにより、建築文化の向上並びに地域社会の健全な発展を図る事業」と位置付けられています。

今年二十五年度に運営する主な賞の内容
1.大阪建築コンクール

大阪府建築士会が単独で主催している賞で、日本の建築賞の中でも、日本建築学会賞に次ぐ歴史があり、約六〇年間の歴史と名誉のある賞です。関西の建築のアカデミズムを継承し、建築家にとって大きな目標になっています。

賞の内容は「大阪府知事賞」を始め、四〇才未満の建築家の登竜門「渡辺節賞」等があります。過去の受賞者は必ずといっていい程、活躍をされ、建築界をリードされる存在になられています。

しかし、二十四年度は残念ながら財政逼迫を受けて中止になり、隔年開催ということになりましたが、今年度は第五九回として新たに運営していく予定です。従来は、ジャンルを隔年毎に「住宅系」

と「非住宅系」に分けていましたが、今年からは同時募集になります。審査委員長、審査委員の人选、公益社団法人移行に伴うオープン化の問題、応募料、応募対象エリア、賞の数；等の新たな課題も多々ありますが、新たに生まれ変わった賞としての視点で運営していく予定です。

2.大阪都市景観建築賞(大阪まちなみ賞)
大阪府内の建築物を表彰する賞で、今年度は第三三回を迎えます。大阪府、大阪市、建築士会の三者主催でしたが、大阪府の財政改革を受けて建築団体も加わり、民間からの協賛による運営形態に変わりました。士会は運営主体として主に事務的な総括を受け持ち、士会会長が運営委員長を担当しています。

3.大阪府公共建築設計コンクール(あすなろ夢建築)
建築を目指す学生を顕彰し、建築家の卵を育てる賞です。大阪府、大阪府住宅供給公社と三者で開催しています。

建築表彰委員会は、基本的に建築に対する民度を向上させるという士会活動の王道を担う委員会と自負しています。公益法人として、住み良い美しい街を創るための手助けとなる建築の啓蒙、また建築士の士気を高めるための表彰を続けていきたいと考えております。



原田 彰
(株)原田彰建築設計事務所 代表
総括設計専攻建築士
1948年 奈良県生まれ、大阪育ち
1970年 大阪工業大学建築学科卒業
設計事務所勤務の後、
1977年 原田彰建築設計事務所設立
1990年 法人設立 現在に至る

広がってゆく、スマートハウス。 そこに、大阪ガスの「ダブル発電」。

家庭用燃料電池「エネファーム」と太陽光発電を組み合わせた「ダブル発電」。

昼も夜も雨の日も、24時間、365日発電でき、自宅で使う電気の


約80%*をまかなえる「ダブル発電」が、

家を、暮らしを、どんどんスマートにしてゆきます。



ガスで発電

太陽光で発電

ガスで実現するスマートハウス  が、スマート!

理事会報告

文責 本会事務局

日時 三月十三日(水)十六時〜十七時三十分
場所 本会会議室

出席 理事三名(委任六名名)、監事二名
名誉会長・顧問・相談役他七名

新任理事候補者九名

(1)二十四年度収支決算見込み

本年度の決算見込みを、収支差引約三九〇万円の黒字予測としている。収入では、情報発信事業の広告収入等、CPD登録や木造耐震講習会、定期講習などが予算に比べて好調であったことが要因である。

(2)二十五年度予算案について

収入面では、特に研修事業の再建を目指して活性化を図り、他の委員会事業も前年実績を基盤としつつも本会の財政健全化に向けて層の努力をお願いする。また、定期講習の全国的な受講者減の傾向、耐震講習会の通常講習(今年度は改訂講習で増)により予測受講者数を減している。支出面では、事務局縮小による賃料の大幅減、退職手当積立金の二五〇万円減として収支のバランスを図る。

(3)二十五年度機構について

新年度の機構は、事業委員会内に置いていた研修委員会として設置し、建築士育成等の研修事業の活性化を図る。

建築士制度推進委員会は、試験登録等の事業は運営委員会が所管し、CPD・専攻及び資格取得講習会は研修委員会が所管することで解散する。

(4)公益社団法人移行認定について

二月十五日付で大阪府公益認定等委員会から大阪府知事宛に本会の移行について公益認定相当の答申があり、三月十九日付で移行認定(予定)、四月二日に公益社団法人に法人登記をする旨を報告した。総会には、三以上の出席者(委任状含む)を必要とするために、四月に事前案内、五月に議案書付案内で出席を呼び掛ける。

建築相談

建築士の見たトラブル事例(九)

電話相談から

編・構成 橋本頼幸

今月の「建築相談」コーナーは、平成二十四年六月から相談員として活躍されている守屋二之様に話題提供をしていただきました。ご承知の通り建築士会では、建築相談室を月・水・金の週三回午後時から五時まで、電話や面談で一般の方を始め設計事務所や施工者、不動産関係者などからの相談を幅広く受け付けております。建築相談室は、約三〇名の建築士会の相談員が二月に二度ぐらいのペースで対応しております。今回は守屋さん自身が電話で受け付けた相談をご紹介します。

一 建てる前の不安……

住宅展示場を見て回って、大手の住宅会社の対応が良い印象だったので、頼みたいが、インターネットを見ると評判が悪い。そちらから見ると住宅会社はどうか。また、大手に頼む場合と町中の工務店に頼む場合とではどちらが良いか?

二 建築中の迷い、後悔、焦り……

現在新築中。近々に引き渡しを受ける予定。南向きの一階は交通量の多い道路に向いており、すぐ前を駐車場にするため、比較的小さな窓にした。二階のバルコニーを大きく取りたい希望から出寸法を二八〇〇mmにしたところ、一階の上下窓に光が入らない。これは仕方の無いことか。掃き出し窓への変更で改善しますか。大工さんと打合せしながら建てたが、クローゼット扉が嫌だと言っていた折戸になっているなど、打合せと違うところがたくさんある。交換させることは出来るのか?

電話相談は顔の見えないこともあり、このような相談者が一方的にこちらの意見を求める相

談や「おかしい」と同意を求めるような相談がしばしば寄せられます。

前者については、匿名で一方的に情報を書き込むインターネットの情報が正しいのかどうかかわりませんし、評判が良いか悪いかという問い合わせには答えられません。きちんと断つた上で、大手と地元工務店のメリットやデメリットを見比べて、自分が主体的になれる相手、より親身になってくれる業者を選んでみる。その一つとして「話しやすい、説明がわかりやすい」を基準にしたり、「住宅を設計する仲間達」に相談したり、手を尽くしてみてもどうか、と回答。

後者は、太陽の角度の説明や南向きの部屋でもバルコニーの出が影響すること、窓の変更は多額な費用や手間がかかることを説明し、要望をしっかりと伝えて、十分な説明を受けて仕事を進めることをアドバイス。

実際に守屋さんが対応した電話でのやりとりだそう。相談員対象の二年度研修会では、「立場の違いによる受け答え」が話し合われました。電話相談には、連棟長屋の切り離し(切り離す側、切り離される側)の相談も多く、守屋さんは、経験豊富な相談員の機知に富み、深い見識に基づき受け答えについての事例や意見はとも参考になる、と感じられたそうです。

電話で、しかも状況は相手からの一方通行で聞き取った内容だけから適切なアドバイスすることは、簡単ではありません。どちらかが悪いといった結論を導くのではなく、本来のあり方を説明し、理解してもらう事が大切です。

建築相談分科会では、相談される側になってもらえる方(相談員)を常に募集しております。電話での一般の相談者とのやりとりは非常に勉強になりますし、自分のスキルアップにもつながります。

編集後記

筑波幸一郎・牧野高尚・荒木公樹

「建築人(けんちくびと)」は今号で五回目を迎えました。石堂威さんは、数々の日本を代表する建築雑誌の編集長を務められた編集者です。われわれが建築を学び始めた頃に慣れ親しんだ『建築二〇世紀』や『GA JAPAN』等の編集に関するお話を伺い、今ではわれわれの血肉と化した「知」も、源泉を辿れば石堂さんの仕事に行き着くことに思いを致しました。

また、石堂さんには「建築人賞」の初代審査委員長として五年間にわたり大変お世話になりました。「建築人賞」は予算の都合もあり、現地審査を前提としていません。それにも関わらず、現地まで確認に向いてくださり、丁寧な審査を心がけておられました。審査委員長の退任を機会に企画された今回のインタビューですが、われわれにとっては貴重な経験となったことを石堂さんへお伝えして感謝の言葉に代えさせていただきます。

そして、新企画である「建築の射程」では山口洋典さんに、「ひろば」建築構造案内」では加登美喜子さんに、いずれも「協働」という言葉の投げかけをいただきました。われわれなりに、この言葉を受け止めて、考え続けることが、次の新たな「協働」を生み出すのだと強く思いました。





塩野義製薬 医薬研究センターSPRC4

竹中工務店設計部 小幡剛也、平岡宏一郎、庄田英行、佐藤達保

大阪市北部を流れる神崎川と阪神高速道路に隣接するSPRC4は、分散した既存4拠点研究所の集約による研究効率の向上及び知の結集による相乗効果、新薬開発サイクルの短期化を実現する医薬研究の基盤施設である。

敷地における最大平面・最小断面の計画とし、立体的ワークプレイスによる研究者間コミュニケーションの活性化を図るとともに、外観を特徴づけるトリプルスキンをはじめ、様々な環境技術を採用し、研究所に求められる知的生産性の向上と社会的に求められる環境性能の両立をはかった。

外装は低層部をコンクリート系材料で統一し、上部は3層にレイヤー化されたアルミ縦ルーバー+ランダムな外壁面+耐力壁によるトリプルスキンとし、バッファ廊下を熱的緩衝帯として利用することで、研究エリアの外気からの熱負荷を大幅に低減している。また地熱利用冷温輻射パネル空調、排熱回収システム、省風量型ヒュームフード・VAVシステム、液状化対策(TOFT工法)や免震構造などを採用した。

建物中心のワークプレイスには、高い階高(5.2m)を利用した中間階や明暗ある光環境によって、不均質で多様な居場所をつくりだすことで、研究者間のコミュニケーションの活性化と研究者の知的生産性の向上を期待している。

撮影：古川泰造 第58回大阪建築コンクール入賞作品

■プロフィール

小幡剛也 (おばた・たけや)
1993年 竹中工務店設計部入社
現在 大阪本店設計部第3設計部門 グループリーダー 課長
平岡宏一郎 (ひらおか・こういちろう)
1990年 竹中工務店設計部入社
現在 大阪本店設計部第3設計部門 課長
庄田英行 (しょうだ・ひでゆき)
1990年 竹中工務店設計部入社
現在 大阪本店設計部第7設計部門 設計主任
佐藤達保 (さとう・たつほ)
2006年 竹中工務店設計部入社
現在 大阪本店設計部第3設計部門 設計担当
ランドスケープ：オンサイト計画設計事務所

■建物データ

建築主：塩野義製薬株式会社
設計：株式会社 竹中工務店
施工：株式会社 竹中工務店
所在地：大阪府豊中市二葉町3-1-1
用途：研究所
竣工：2011年7月
構造規模：SRC造 一部S及びRC造
地上5階 塔屋1階
敷地面積：34627.97㎡
建築面積：10069.80㎡
延床面積：43929.84㎡

